

第1回 信州学び円卓会議

日 時：令和5年9月1日（金）
13時20分～16時00分
場 所：県立長野図書館 3F
信州・学び創造ラボ
（※オンライン併用）

1 開 会

○丸山課長

ただいまから「第1回信州学び円卓会議」を開会いたします。

本日は御多忙のところ御出席を賜り、誠にありがとうございます。私は、会議の進行を務めます長野県県民文化部県民の学び支援課長の丸山でございます。どうぞよろしくお願ひいたします。

まず初めに、信州学び円卓会議の設置を呼びかけました県の立場から、本会議に期待することを含め、知事より一言お願ひをいたします。

○阿部知事

皆様、こんにちは。各メンバーの皆様には、大変お忙しい中、この円卓会議にお集まりいただきまして、まずは大変ありがとうございます。

冒頭、私の問題意識を少し皆様と共有させていただきたいと思ひます。

今、私、県内全市町村を回っていて、県民の皆様と対話集会を行わせていただいているところです。この対話集会、市町村ごとにテーマをつくっていただき、それを基に、お越しいただいた皆さんと対話をさせていただいています。今、63市町村を回らせていただきました。

しかしながら、そういう中で、テーマ以外の問題についてもどうぞ御発言くださいという時間をつくっていますし、またこの対話集会とは別に、各市町村長の皆様とは、日頃なかなか全体の県政課題ということでは話題になりづらい各市町村固有の課題について意見交換をさせていただいています。

そういう中で、最も多く出てくるのは教育の問題であります。いろいろな観点の御指摘、御提言、苦情、意見、様々ありますけれども、キーワードとして私が感じているのは「選択肢を増やしてほしい」ということは非常に多く言われます。不登校の子どもが学校に行くか行かないかという二者択一ではなくて、もう少し違う居場所ができないか。あるいは発達障害や医療的ケアが必要な子どもたちの教育の場、特別支援学校に行くのか、通常学級に行くのか、それ以外のいろいろな多様な場もあっていいのではないかと、多様なサポート体制があってもいいのではないかと。

あるいは、長野県は東京と違ってほとんどが公立高校です。東京であれば様々な私学があって、通学できる場所にいろいろな選択肢があるけれども、なかなか長野県は交通の事情もあって、そうした選択肢がないけれども、もっと一人一人の子どもたちに合った教育ができないのだろうか。あるいは中山間地、町や村の皆さんからすると、子どもたちの

数に従ってどんどん減っていくと先生たちの数も減ってしまう。市町村が頑張ってそこを支えている、あるいはいろいろな専門教科の先生方が少なくなる中で、本当にこうした町や村の教育はこのままでいいのでしょうかと、挙げれば切りがありません。

日頃私は県知事として仕事をさせていただいています。隣に内堀教育長がいらっしゃるしますので、教育行政について基本的には教育委員会が所管しているということで、私が出席する会議の場においては、今申し上げたような教育の議論を正面からすることはほとんどございません。

しかしながら、県民の皆様方の課題やニーズ、夢や希望、そういうことをお伺いする中では、何とか教育の問題を前に進めてもらいたい、改革をしてもらいたい、よりよいものにしてもらいたい、そういう切実なニーズを私は受け止めています。これは選挙で選んでいただいている私の立場としては、「それは私の所管外です」ということで黙って見るわけにはいかないと思っています。

今回こういう形で円卓会議という形式を取らせていただいていますけれども、私は対話集会でもそうですけれども、例えば信州の学びのあり方、教育のあり方を変えていく、考えていく、そのためにはもちろん内堀教育長、あるいは教育委員会の皆様にも力を発揮していただかなければいけませんし、あるいは予算であったり、制度面では、私も知事としての役割・責任をしっかりと果たしていかなければいけないと思っています。

しかしながら、内堀教育長と私が頑張れば長野県の教育が変わるか、良い方向に行くかといえば、全くそんなことはないだろうと思っています。

むしろ学校現場の先生方、校長先生をはじめとする教員の皆様が、本当に目指す教育の姿を実現できるようにサポートしていくこと、あるいは昨日も経済界の皆さんとも意見交換をさせていただきましたけれども、産業界・経済界の皆さん方にとっても、長野県における教育がどういう形になっていくのか、子どもたちの学びがどうなっていくのかというのは、これは長野県の産業の発展にとっても、あるいは地域の発展にとっても極めて重要なテーマであります。

そういう意味では、学校経営であったり、あるいは教育についても、多くの皆様がもっとももっと平素からいろいろな発言・提言をいただき、そうしたものを受け止めながら多くの関係者、今日お集まりいただいている学校の先生方、校長先生方、あるいは市町村教育委員会、教育関係の皆様をはじめ、多くの皆様が同じ方向を向いたり、問題意識を共有しながら、長野県の学びのあり方、そして教育のあり方を考えて実行していかなければいけないと思っています。

そういう意味で、この円卓会議、通常の県が設置する検討会議とか、あるいは審議会とは全く違うものだと思います。審議会とか検討会議は、御議論いただいたものを私が受け取って、それを県として施策に反映していくということがもっぱらの役割でありますけれども、私としては、この円卓会議、多くの皆様方に御参加をいただいていますので、ぜひそれぞれの皆さんにもここで御議論いただくだけではなくて、プレーヤーとして行動していただきたいと思います。そして一緒になってこの長野県の学び、教育を変える、そうした仲間として、同志として一緒に行動をしていただければ大変ありがたいと思っています。

私は子どもたち一人ひとりを中心にした子どもたちの様々な個性や能力、特性、こうし

たものに合った教育をしっかりと具現化していくということがまずは重要だと思っています。

昨日も、私、内外情勢調査会で松本市で県政全般の話をさせていただきました。その中で、少し憲法の話させていただきました。憲法の中にも教育を受ける権利というものが明確に位置づけられているわけです。しかしながら、先ほど申し上げたように、今の教育であったり、学びであったり、子どもたちや保護者から見たときには、もっともっとよりよいものにしてもらいたい、もっと改善してもらいたい、そういう切実なニーズがたくさんあります。

そしてまさにAI時代と言われている今日、これから20年後、30年後、将来活躍する子どもたちに、どのような学びの場を提供するのが望ましいのかというのは、これは過去の延長ではなくて、未来からのバックキャスティングで、今を生きる私たちがしっかりと考えていかなければいけない重要な課題だと思っています。

そういう意味では、私としては知事の立場でありますので、できるだけ県民の皆様の思いに即した形で、教育が、あるいは学びがよりよいものになるように、全力で取り組んでいきたいと思っています。

教育県と言われ続けてきたこの長野県。本当に今日お集まりいただいている教育関係の皆様はじめ、多くの県民の皆様の方で、この教育を充実させ、日本の中でも教育県として一目置かれる存在として発展してきました。しかしながら、今の長野県の教育、先ほど申し上げたように、県民の皆様から見ても、もっともっとこういうところを改善してほしい、こういうふうにしてほしい、そういうニーズがたくさんございます。

ぜひ皆さんとともに、未来志向で、今ある課題を直視しながらも、本当に子どもたちにとって最適な学びが何なのかということ突き詰めていきたいと思っておりますし、またそうしたことをサポートするために、教育行政のシステムのあり方を含め、教員の皆様も多忙だということがずっと言われてきていますので、子どもたちの学びを充実するための周辺の制度や仕組み、こうしたものについても皆さんと一緒に議論をして、変えるべきところはしっかりと変えていきたいと思っています。

長野県の新しい総合計画は、「確かな暮らしを守り、信州からゆたかな社会を創る」ということを掲げております。私としては、ぜひこの長野県から、信州から、新しい教育モデルをつくる、こういう決意で臨んでいきたいと思っておりますので、どうか皆様も一緒になって取り組み、一緒になって考え、行動いただければと思います。

どうぞよろしく願いいたします。

○丸山課長

次に、構成員の皆様の御紹介をさせていただきます。

本来であればお一人ずつ御紹介すべきところですが、時間の都合もございますので、お手元に配付いたしました名簿に代えさせていただきます。御確認をお願いいたします。

なお、根羽村の大久保村長、NPO法人 Hug の篠田代表は、オンライン参加となります。

また、会則第11条第6項の規定により、本日オブザーバーとして阿部知事、内堀教育長にも出席をいただいております。

次に、会議事項に入る前に、事務局からあらかじめ御承知おきいただきたい点について、3点御説明いたします。

まず、この会議については公開で行うとともに、会議資料、議事録及び撮影した写真などについて県のホームページに掲載をいたしますので、御承知おきください。

2点目ですが、この会議の様子はライブ配信をさせていただきますとともに、議事録を作成するため録音をさせていただきます。

3点目でございます。議論の内容を視覚化するため、グラフィックレコーディングを行い、本日の意見交換終了後に振り返りを行う際に使用したいと考えております。また、完成したものについても、県のホームページなどに掲載をいたしますので、あらかじめ御承知いただきますようお願いいたします。

次に資料の確認をいたします。お配りいたしました資料は、お手元の配付資料一覧のとおりでございます。不足等ございませんでしょうか。よろしいでしょうか。

2 意見交換 テーマ「長野県の子どもたちにとって最適な学びのあり方」

(1) テーマへの思いの共有

(2) 円卓会議として目指す姿の方向付け

○丸山課長

それでは会議事項に入らせていただきます。会則第11条第4項の規定により、座長は運営委員会の委員長が務めることとなっておりますので、信州大学教職支援センター、荒井准教授に座長をお務めいただきます。

ここからの進行は、荒井座長にお願いいたします。

○荒井座長

信州大学の荒井でございます。よろしくお願ひいたします。簡単に挨拶させていただきます。

先ほど知事から御挨拶いただきましたが、もっと選択肢を増やしてほしいという子どもや保護者、地域住民の切実な思いに対して、選択肢を増やすのみならず、その選択肢を選択できるような、個人の選択を支えていく仕組みも重ねて検討していく必要があると考えています。

今回お集まりいただいている皆様から、様々な御意見をいただきつつ、県民の皆さんとも対話の会を設けて、当事者の私たちに何ができるかを考えていく、そのようなきっかけになればと思っています。よろしくお願ひいたします。

冒頭、事務局から資料説明いただき、意見交換に入りたいと思います。よろしくお願ひいたします。

○事務局

では、資料の説明をいたします。

資料1を御覧ください。テーマ「長野県の子どもたちにとって最適な学びのあり方」のありたい姿について。こちらは委員の皆様事前にアンケートを行い、その中から議論のき

っかけとなりそうなキーワードを抜粋したものでございます。

続きまして資料2です。テーマ「長野県の子どもたちにとって最適な学びのあり方」のありたい姿を実現するための論点。こちら委員の皆様にも事前アンケートを行い、出された意見を取りまとめたものです。

参考資料の1として「学びに関するデータ集」、参考資料2として第4次長野県教育振興基本計画のコンセプトブックを配付しております。

資料の説明は以上です。

○荒井座長

ありがとうございます。配付資料に不足等ありましたら、事務局にお声かけください。

それでは意見交換に入らせていただきます。

冒頭、事務局から御紹介いただきました「コンセプトブック」を御覧ください。

今回のメンバーにも入っておられます村松委員を座長としながら、岩瀬委員、近藤委員も含めて、私自身もお手伝いをさせていただきます。昨年度末に策定されたものが、長野県第4次教育振興基本計画です。ここでは他県に先駆けて「個人と社会のウェルビーイングの実現」というメッセージを込めました。

また、1枚めくっていただきますと、「一人ひとりの『好き』や『楽しい』、『なぜ』をとことん追求できる『探究県』の長野」を実現していくというコンセプトを掲げ、こちらのコンセプトブックや動画配信による説明も行われています。今回の場も、これまで議論してきたこのコンセプトを具体化すべくどのようなことができるかという観点の一つに位置付けられていると捉えています。

では、委員の皆様から、1人5分程度、御発言をいただきます。発言は、「長野県の子どもたちにとっての最適な学びのあり方」というテーマで御意見を頂戴したいと思っております。

では、岩瀬委員からお願いいたします。

○岩瀬委員

皆さん、こんにちは。軽井沢風越学園校長の岩瀬と申します。

僕は公立の小学校で22年間小学校教員をしておりまして、ずっと公立学校で学習中心の学びや、研究主任として校内研修に基づく組織づくりに取り組んできました。2015年から東京学芸大学教職大学院で教師教育と教員養成、主にカリキュラムデザイン、ファシリテーション、学級経営などの授業を担当して教員養成や教師教育に努めてきました。今は軽井沢風越学園の校長をして4年目になります。

もともと風越学園をつくるきっかけは、理事長の本城と、幸せな子ども時代を過ごせる学校を公教育でやりたいという思いからスタートしました。もともとは公設民営でできないかということからスタートしたのですが、なかなか制度の縛りで難しい、制度が変わっていくのを待つのかどうするかといったときに、だったらまず私立学校でチャレンジをして、そこから公立学校が変わっていく触媒になっていけるようにチャレンジしようということでスタートしました。

僕の志としてはデューイのシカゴ実験学校の取組という感じでチャレンジをして、ここ

で行っている様々なチャレンジが、公立の学校が変わっていく触媒になっていくということイメージしていました。

やり始めてみると順調に問題だらけで、今4年目に入りましたが、ようやく学校とか学びで大切なのはこういうことかなというところが見え始めてきているところです。

先ほど荒井座長からもありましたが、このコンセプトブックをつくる有識者懇談会にも参加させていただいて、改めて長野県の目指す学びのあり方というのがここに描かれているなどと思います。個別最適であるということは、結局一人ひとりが「好き」や「楽しい」をとことん追求できる、まさに探究県長野の学びということをどうやって実装していくかが、僕は今回のこの会議の一番大事な論点と考えています。

プランニングまではできるのですが、実装フェーズになると、様々な制度や仕組みが邪魔をするということがまず一つあります。もう一つは、どうしても特に公立の学校制度は頑健なシステムですので、基本的に「変わらない仕組み」になっています。日本全国どこに引っ越しても困らないというのは、どこに行っても変わらないということと同義ですから、変わらない仕組みや横並びになるというのが、仕組みと文化としてあるのが大きい、学校が変わらない原因だと思っています。

僕の大きい問いとしてはシンプルに、「バラエティーに富んだ学校が増えていくためにはどうすればいいか」という問いです。変わらない仕組みから変わっていく仕組み、システムをつくっていくのをここで議論できればいいなと思っています。

そのための重要なポイントは、施策を下ろしていくという形よりも、現場を信頼して教員をパートナーとして、そこで自律的にチャレンジできるという環境と仕組みをつくっていく。そこにリソースを投下していくということが学校が変化していくための大きな鍵ではないかと思っています。

「個別最適」という言葉は結構パワーワードで、全てが言えている感じがしてしまうのですが、その内実は何なのかということ突き詰めれば、一人ひとりの多様性にマッチするという。ということは、学校が一つの形では子どもたちの多様さにはマッチできるはずはなく、学校が多様になっていくということ、県民の皆さんと一緒に合意しつつ、学校のチャレンジを応援できるような仕組みをここで議論できたらと思っています。よろしくをお願いします。

○荒井座長

ありがとうございました。

では、続いて、浦野委員、お願いします。

○浦野委員

飯田養護学校の校長の浦野と申します。よろしくお願ひいたします。

特別支援学校の校長をやらせていただいているのですが、特別支援学校では、本当に昔から、ここに書いてある「好き」や「楽しい」「したい」「やりたい」を一番大事にしてやっていきたいと思いますという形で子どもたちの教育を進めてきています。

職員の人数も多いですし、時間もゆったりしているというところから、子どもたちの「したい」「やりたい」というものを実現しやすいものはあるかなと思っていますけれども、

子どもたちもそれぞれ特性があったりしますので、その特性に応じた形での支援が必要になってきますので、それだけに職員の専門性ということも大事にしながら、今、進めているところでもあります。

ちょっと書かせていただいたのですが、うちの学校でもそうですし、どこの特別支援学校でも、「したい」「やりたい」と言う前に「学校に来たいな」と、学校がまず安心な場所だと思ってもらうことが一番大事かと思っています。

子どもたちは家庭が一番中心になっているのですが、家庭から出たときには、まず学童期はどうしても学校というものがあると思うのですが、学校が安心できる場所になっている、それによって、まず自分が「したい」「やりたい」が出てくるんじゃないかと感じています。先生方にも、子どもたちが安心できるような環境をつくることをまずベースにしましょうと。だから叱られたり怒られたりしないというのは当然ですし、子どもたちが何かやったときに、困っているなというときに、一緒に寄り添えるということが一番大事にしています。

子どもたちが「したい」「やりたい」ということを出してきたときに、それに応じてできるような支援をとということを考えていくのが教員の専門性かと思っていますが、特別支援学校だけではなくて、小中学校でもまずは安心感というのができてくると、選択肢も広まるのではないかと思います。どうしても特別支援学校に来るお子さんは、就学判断で来ているお子さんが多いのですけれども、学校だと特別支援学校が安心できる場所だという視点で見られているところもあるかなと思います。小中学校も当然安心できる場所があると思うんです。

ですので、まずベースとして、長野県全体の小中学校、高校が、そのようになっていくと、子どもたちの選択肢が広がるんじゃないかと思います。

不登校のお子さんもそうですが、学校以外の場所にいろいろな場所を求めたりするというのも、たぶんその場所が安心できる、落ち着く環境ではないかなと。またそこで学べるというのも一つの選択肢かなと感じておりますけれども、まずそこがベースになるといいと思います。

今日は、午前中にも会議があつて、教育長のお話の中で第4次長野県教育振興基本計画において、特に教員主導であったものが子ども主体に、「させる」ではなくて「したいな」ということを大事にとおっしゃっていましたが、特別支援学校で一番大事にしているのは、使役的な言葉を使わないようにする、子どもたちに「～させる」「～させましょう」とまずしないようにする。それがまず大事にしていることにつながると思います。

そうするに当たっても、職員の働き方も大事だと思っています。先ほど岩瀬委員からも出ていたのですが、変わらない仕組みというのが結構学校の中にはあつて、学校の教員は何をやらなければいけないかと考えると、一番大事にしなければいけないのは子どもたちと一緒に学んでいくことではないかと思うのですが、仕事がたくさんあるので、何を大事にしたらいかがが見えていないのではと思います。

今、うちの学校の中でも、教員免許がないとできない仕事は何か考えてくださいと、先生たちに投げかけているんです。それを先生方が中心になってやっていけるようにするためには、それ以外の仕事をやっていただく方も必要になるということを感じています。

特別支援学校で実は、スクール・サポート・スタッフ以外にも本校の卒業生が学校に来

て事務的なことをやってくださいます。その方にとってもいい仕事の場になっていますし、先生方もとても助けられている。その方が先生に、「助かっているよ。本当に君のおかげだよ」と言ってもらえることによってやりがいを感じている。できれば、特別支援学校の子どもたちも、「あなたのおかげでこんなことが助かっているよ」と、仕事じゃなくても、重度の子どもさんでも、そのお子さんが笑ってくれるだけでも、「あなたがいてくれてよかった」と言ってくれる。それも一つのやりがいじゃないかなと。そうやってやりがいが社会の中で認められる形になってくるといいかと思います。

すみません、長くなりました。

○荒井座長

ありがとうございます。

名簿順で行きますと、大久保委員になりますが、最初に対面の参加者から自己紹介いただけたらと思います。

では、続いて、草本委員、お願いします。

○草本委員

ありがとうございます。白馬インターナショナルスクール代表をしております草本と申します。今日はよろしく願いいたします。

私は、もともと全然教育畑ではなく、外資系の金融機関で長く働いており、海外で仕事をしてまいりました。まさか自分が学校を設立することになるとは正直思っておりませんでした。

2009年に自分の子どもを美しい白馬の大自然の中で育てたいと思って、子どもが5歳のときに家族で引っ越してまいりました。子どもが3人おりますけれども、すばらしい子ども時代を子どもたちに与えることができ、白馬には本当に感謝しかないという感じです。

最初に私が教育について本当に考えるようになったのは、2014年に白馬高校が存続の危機を迎えまして、そのときに魅力化委員会に加えていただいて、白馬高校を存続させるためにどうしたらいいのかということを経験していろいろ考えたのが最初のきっかけだったかと思っています。

やはり地方創生とよく言われますが、教育こそがやはり一番の鍵だなとそのときにすごく感じました。教育が不安だと思われてしまうと、やはり私のように外から移住してきた人も、また子どもが高校に上がるタイミングで引っ越ししたり、あるいはもともと白馬に住んでいた人も子どもの進学に合わせていなくなってしまうようなことを目の当たりにして、白馬に恩返しができるとしたら何かということで、やはり教育の分野で何かができないかと考えて、昨年インターナショナルスクールを開校いたしました。

先ほど岩瀬先生のお話を聞いていて、すごく近いなと思いました。私も最初、白馬高校や白馬の小中学校とか、公立で何かできるのではないかということで、例えば、白馬でITの学校をつくることなどを考えました。

でも、やはり、先生方からもお話があったのですが、教育はすごくステークホルダーが多くて、とても大事な分野であるだけに、どうしても変えるのがなかなか難しいという。

特に公立の学びに私みたいな教育畑でなかった者が入るといったら、まあ100年はかかると思って、例えば私立でもいいから、何かこういうのもあるんじゃないですかということをご提案できれば、もしかしたらそれで認めていただければ、そこから少しずつ広がっていくこともあるのではないかと、あえて英語で教育を提供する私学のインターナショナルスクールということで、公立の学校から生徒を奪うようなこともないだろうということで、今学校を運営しています。いろいろびっくりするほどたくさん失敗しながら、頑張っているところです。

まさに岩瀬先生がおっしゃったように、うちの学校もラボスクールみたいな形でいろいろなことを試してみて、もし良さそうだなと思っていただければ、それがまた公立の学校の先生方にも取り入れていただければという思いで、いろいろなことに、プロジェクト型などに挑戦しているところです。

私自身を振り返っても、日本の教育というのは非常にレベルが高いのは間違いないと思っています。私は九州の田舎の出身ですが、自分が世界でそれなりに働きながら闘うことができたのは、やはり日本の教育のおかげだったなと思いますし、そういう意味では本当に素晴らしいものを持っていると思うのですが、同時に、先ほどの知事のお話にもあったように、世界がどんどん変わっていく中で、私たちは本当に今まで自分たちが恩恵を受けてきた教育を守り続けていいのかどうかというのは、皆さんの中にもとても大きな問題意識としてあるのではないかと思います。

教育者の、日本の教師の先生方は本当に一生懸命で、長時間労働もいとわずに子どものためにいろいろなことをしてくださっているのですが、それと同時に、こういう教育を提供しなければならぬみたいな、自分たちが受けてきた教育から、今後も子どもたちにある程度の教育は与えてあげなければいけないみたいな、いろいろな呪縛があるのかなと思っていて、そこをもっといろいろな形の学びがあってもいいなということをごみんなで考えていけたらいいなと思っています。

もう一つ、長野県の学びという点でいきますと、私も白馬に引っ越してから環境の問題について深く考えるようになりました。桜の時期がすごく早くなったり、白馬に住んでいると本当にびっくりするぐらい気候変動の影響を感じます。ですから、長野県こそ、持続可能な未来の担い手をつくれる、そういった教育を提言していけるのではないかと考えておりますので、そのような形で皆さんと一緒に話をしながら考えていけたらと思っています。よろしくごお願いいたします。

○荒井座長

ありがとうございました。

では、続いて、近藤委員、お願いします。

○近藤委員

長野県の市町村教育委員会連絡協議会の会長をさせていただいております長野市の近藤と申します。どうぞよろしくごお願いいたします。

私もこの第4次教育振興基本計画の策定委員をやらせていただいておりますが、やはり個人と社会のウェルビーイングの実現という、素晴らしいものができたらと考えており、

これからはこれを実現すべく、長野県の市町村教育委員会で頑張っていたらと思っています。

ただこれを、先ほどから意見が出ておりますように、実現するに当たっては、子どもたちの学びを支えていくあり方として、もっとうような制度ができたらいいのではとか、もしかしたらこんな仕組みになればもっと良くなるのでは等ということについて考えたことがございます。会長という立場を離れて、個人として、未来からも見つめ直すという形で現状を分析することができたらと思っています。

もちろん今のあり方の中からどう変えていくかという制度ですから、それを壊していくことは考えていないのですが、その中と結び合わせながらどう変えていくことができるかということで、皆さんから御意見をいただければ、今までよりも子どもたちによりよい学び、自分の学びが進められるのではないかと、そんなことを考えて出席させていただいております。

例えば、新しい制度、教員の働き方改革ということではいっばい出てくるのですが、じゃあそれを実際に学校の教員が全部やったら、学校自体に先生がいなくなってしまう、小さい学校がなくなるという事態が起きる可能性があって、教員の働き方を守る一方、子どもたちの学びを支えていく仕組みもきちんとなさなければいけないというところで、そういう点も少しずつ改善していくべきと考えており、これはやはり教育行政、教育委員会だけではなく、他の部局と連携協力し合ってやっていかないとできない問題がいっぱいあると思います。簡単ですが以上です。

○荒井座長

ありがとうございます。

では、続いて、竹内委員、お願いします。

○竹内委員

山ノ内町の教育長をこの4月から務めております竹内と申します。よろしく申し上げます。

私自身はもともと、今ここにいる原点は、20代前半に、まだ学生でしたけれども、東京でフリースクールのスタッフをしていたことです。24歳から5年ぐらいの間だけですけども、都内で結構大きなフリースクールだったのですが、そこで様々な子どもたちとの出会い、また保護者、先生方との出会いの中で自分が感じたり学んだりしたこと、それが、その後30年ちょっとたちますが、今の私の原点になっているなと思います。それからまた、その後40歳過ぎまでずっと東京で学校の外側にいる子ども・若者たちとの関わりの仕事をしてきました。

そんな経験を評価していただいたのか、2011年に長野県庁に入れていただきまして、次世代サポート課で8年間仕事をさせていただきました。その間、子ども・若者支援全般と自然保育の制度創設・普及に関わらせていただきました。その後3年間、北安曇郡池田町で教育長をやらせていただきまして、またこの4月からは北にあります山ノ内町に勤めております。

山ノ内町は、今、小学校3校、中学校1校で、人口は1万1,000人で小さな自治体です

けれども、先ほど来お話がありますけれども、志賀高原という国立公園、ユネスコエコパークがございまして、小中学校は4校ともユネスコスクールに登録もしております。ESDも積極的に取り組んでいるということで、本当に地域とつながった学びを実践していると感じている中で、現場のやる気のある先生方をどうやって教育委員会として支えていくかということ、改めて今、日々自分なりに考えているところです。

御存じのように、長野県77市町村、そのうち58の町村ということで、町村の数が非常に多いです。今日私は、その58の町村の代表という立場ではなくて、一個人としての経験の中で何かお役に立てればということで参加させていただいているのですが、今回この会議に参加するに当たって、私なりに大きく三つのテーマというか、課題を整理させていただきました。

まず一つ目は、自立した教育者であるべき現場の先生方の自由な意見表明と意思決定を尊重するということが大事だと思っています。あわせて、マネジメント力のある校長先生のガバナンスによる主体的な学校経営の自治を保障すること。本当に現場の先生方の自由度を高め、また自治の力を高めていくということが、私が今まで池田町、そして今、山ノ内町で意欲もあり能力もある先生方がたくさんいるということを実感する中で、やはりそういう先生方に思う存分、子どものために力を発揮していただきたいと思っています。そういう中で、じゃあ教育行政はどういう関わりがいいのだろうということを感じています。

2番目に、そうした公立学校を増やすためには、指導・管理よりも、支援や研究機能を強化した教育行政のあり方、そして学校現場との関係性というものを抜本的に見直すことが大事ではないかと感じています。

最後3番目は、義務教育段階、小中学校の学びの質の向上と多様な子ども一人ひとりの最善の利益の追求に対応できる柔軟な学校運営を実現するために、まず一つ、私としては、高校入試のあり方を抜本的に見直すということが重要と考えています。そしてまた、教員配置については国の財源の大きな制約があるのですけれども、できれば県独自の教員配置基準というものについて、ぜひこの会議の中で多くの皆さんと議論ができればと思っています。

いきなり少し乱暴な発言かもしれませんが、この会議に参加するに当たって、私としてはそんな問題意識を持って、多くの方々と忖度なく議論をさせていただければと思っています。以上です。

○荒井座長

ありがとうございました。

では、続いて、武田委員、お願いします。

○武田委員

信濃教育会の武田と申します。よろしくお願ひいたします。

信濃教育会は、県内の小中学校の先生方を中心に、自らの職能を向上させるということを目的にしている職能集団でございます。1万人近い会員で構成をしております。

長野県は南北に長く、谷も深いので、それぞれの地区に特有の教育文化を育んできたと思っています。信州教育が最も輝いたと言われる大正時代から昭和の初期に関しては、学

校にはそれぞれ人格があって、教師一人ひとりが自律的であったと言われていました。ですから、信州教育というのは何か形があったり、何か内容があったり、成果を出したとかそういうことではなくて、一人ひとりの教師のあり方そのものが信州教育であり、特色としては、上からつくられたものではなくて、教員側からつくられたものが信州教育だと思っています。

昭和の初期に諏訪の泉野村、今の茅野市ですけれども、そこに藤森省吾という校長がいて、この方が農村教育という実践をいたしました。藤森省吾は10年計画で、つまりその当時の校長というのは10年ぐらいいたということですが、農村教育の実践をひくのですけれども、その一番のコンセプトは、健全なる田舎を有する国家・社会は力強いという考えに基づき、健全なる田舎をつくっていくということでありました。

この農村教育は、一つは子どもたちへの教育、二つは村の青年への教育、三つ目は若い教員の育成という三つを総合的に組み合わせた、今で言うとキャリア教育に当たるような計画です。

そのようなことが多く行われた本県でございますけれども、現在、私は個人的に、山間地の学校も市街地の学校も同じようなことをやっているんじゃないかと思います。それぞれの地域の特色や地域が持っている資源というものを生かした教育というのはなかなかできていない、地域に密着した教育となっていないのではないかと思います。

この会議の主たるテーマは、子どもの選択肢を増やすということですから、子どもや保護者の皆さんの選択肢を多くするということは、学校に特色がなければいけないと思います。特色のある学校が幾つもあると初めて選択肢の充実となり、同じような学校が幾つあっても選択肢にはならないだろうと思います。

長野県の子どもたち一人ひとりがその地に生まれたことを誇りに思えるような教育活動をしていくこと、あるいはそういう地域を目指していく、そういう学校をつくっていくということが選択肢を増やすことになるのだろうと思います。

そのために、今まで何人かの委員がおっしゃっていたことと同じですが、やはり一番子どもに近いところにいる学校や先生たちが自由であることが必要だと思います。その先生や学校に自由、あるいは挑戦をしていいものを支えるために、教育行政や私たちがいるのではないかと思います。以上です。

○荒井座長

ありがとうございました。

では、続いて、徳永委員、お願いします。

○徳永委員

松本県ヶ丘高校で校長をしております徳永と申します。

率直な感想からですけれども、知事部局がこういう会議を立ち上げた意味は何だろうかということ、この一月ずっと考えていました。恐らく学校教育や社会教育という範疇ではなくて、子ども、保護者、地域の人から見た長野県の学びはこうであったらいいのになという意見を吸い上げて、長野県の教育をトータルで考える会議なのかなと解釈をしました。

ただ、自分は学校の人間なので軸足が学校になるのですが、理想とする学びについてお話しするとすれば、やはり学校が変わらないと教育が変わらないと思っており、特に教員を取り巻く環境を整備することが必要なのではないかと考えています。

私、実は昨年フィンランドに1週間ほど行かせていただきました。そのままフィンランドの仕組みを長野県に取り入れるのは不可能だということが前提でのお話ですが、小学校とか図書館とか視察をして、一番印象に残っているのは、この国では教員が人気の職業であって、教員の専門性が高いということと、教員が人間として日々生活を充実させながら仕事ができているということが大変印象に残りました。

先生方は3時半というと、もう仕事が終わって自宅へ帰っていますし、男性でも当然育児をやります。それから兼業可能なので、夕方から市議会議員として活動をされている職員もいましたし、校長先生の半分は女性でした。

私が行きましたのは首都のヘルシンキからバス2時間ぐらいの田舎の学校で、冬は学校の庭でクロスカントリーができるということだったのですが、学校の設備がすばらしくて、特に特別な配慮の必要な子どものための部屋というのもありました。施設の改修は、実は校長に予算と裁量があって、校長が好きに改築していいということで、どこの学校もそうらしいのですが、教員が休み時間にお茶を飲みながら、カフェのようなところでくつろいで教育談義ができるという、本当に先生方の表情にもゆとりがありましたし、子どもたちも楽しそうでした。

お聞きすると、フィンランドでは教員になるには教育学部を出て大学院の修士課程を修了しているということが条件で、幼児教育の従事者も近い将来、四年制大学を卒業した者しか従事できないという仕組みにだんだん変えていくということでした。

教員は、要するに医師、お医者さんと同じレベルで専門性を身につけないと教壇に立てないということあるがゆえに人気の職業で、学び直しをして違う職業から教員になる方も多いようですし、校長も専門の研修を受けた人しか校長になれないようなことを聞いて、専門的な職業として教員の社会的地位が高く、幼児教育をなさる先生方も、私たちがこの国の高等教育の基礎を支えているんだという自覚の下で携わっていることに、本当に衝撃を受け、うらやましいなと思いました。

どうして日本が教員が不足しているのか、なり手がいないのか、ここで比較してみると何となく見えてきました。実は先生方も教職大学院等で学び直しをしたいと思ったりしているのですが、忙しくて時間がないですし、フィンランドみたいに学費が無料というわけにもいかないの、やはり二の足を踏んでいるのだと思います。

それから、私の職場でも今育休を取りたい男性職員が増えてきています。家族を大切にしながら働きたいという要望にも応えられる環境でないし、自分が休むと誰かに代わってもらわないといけないという中で仕事をされているのが現状です。

急にフィンランドのようにやるということは無理だと思っているのですが、例えば今、県教委が探究コーディネーターを各学校に配置したらどうかと、外部人材の登用を考えてくださっていて、そういうことが教員の負担軽減に大いに貢献すると思うのですが、やはり十分な予算があって初めて探究活動に取り組める環境になるのかなと考えています。

県ヶ丘高校は3年前から探究コーディネーターを雇用していますが、民間企業の助成金で賄っている状況です。コロナでWi-Fiも整えましたが、教室は昭和のままで、昭和の教

室で令和の教育をしようと、そういう状況では限界があるかと思っています。

昨年実は、職員と全国いろいろな学校に視察に行きました。探究先進校と言われるような学校は本当に施設がすばらしくて、実は本校にもこの2年間で40校ぐらいから視察に来ていただいているのですが、私は案内するときに、なるべく傷んでいる廊下は通らないようにとか、煙突がついているストーブを見て皆さんどう思うだろうかと思いつつ、ちょっと恥ずかしいと思うときもあるのですが、そういう環境の中で、本当に先生方はよくやってくれているなと思っています。

最後にまとめになるのですが、お金をかけずしていい教育というのは、私は難しいと思っています。保護者や生徒に意見を聞いても、必ず学校の環境整備をしてほしいという声が上がってくるのは目に見えているので、教育はお金がかかるものという、こういう会議を開いた以上は、かなりの予算を教育につぎ込む覚悟で県民を巻き込んでもらいたいと思っていますし……

○阿部知事

かけます。（会場笑い）

私がこうやってやっているのは、どこに優先的にお金を配分するかというのは知事の立場にしか与えられていないので、そういう意味では、教育議論に私はこれまでほとんどコミットしていないので、それは明らかに教育行政システムの欠点なので、そういう意味でもそこはしっかり考えますので、よろしく願いいたします。

○徳永委員

ありがとうございます。もう何人かの先生がおっしゃったのですけれども、やはり教員を大切に、教員を信頼して任せてもらいたい、学校の自治というところを大切にもらいたいと個人的には思っています。以上です。

○荒井座長

ありがとうございました。

今の知事の発言はぜひ記録に残しておきたいと思います。よろしく願いいたします。

では、続いて、畠山委員、お願いします。

○畠山委員

よろしく願いいたします。上田市立第五中学校の校長をやっております畠山と申します。

先ほど知事のほうから、未来からというお話があったわけですが、徳永先生もおっしゃるとおり、私も公立の学校で校長をしている身であります。この役を受けてから、どのような選択肢が考えられるんだろうとか、これからの教育についていろいろ考えたのですが、なかなか現実から離れることができません。

長野県の子どもにとって最適な学びはというテーマですけれども、現在の中学校の現状をベースとして、そこからどんなことができるのか話をしていかないと、大きな理想はいっぱいあるのですが、なかなか公立の学校を変えることができないので、そのような話を

させていただきたいと思っています。

探究や好きなこと、楽しいことを追究できる時間というのが一体今の中学校の中でどれだけつくれるかという話の中で、中学校でいくと教科の授業時数は年間1,015時間ほどあります。登校日数を考えると、一年間で大体1,100時間ぐらいになります。そのうちの1,015時間は教科の時間ということになるので、余剰時間が80～90時間あるのですが、それは学級の最初の指導などであり、なかなか現状から新しい時間を創設するのは難しいかと思っています。

それこそ高校入試制度が変わったり、授業内容が削られたりすることであると、学校として使っていきたい時間も増えてくるわけですが、そのためには調整が必要になり、現実的には今の中学校では、子どもたちが本当に学びが楽しいと思ってやるには、1時間の授業をどうやって充実させるかということしかないのかなと思っています。

もちろん、新しい学習指導要領でいわれている「主体的・対話的で深い学び」に向けて、これでもう中学校は3年たつわけですが、どんなふうに授業改善がされているかというのはそれぞれの学校で、校長先生を中心にやられていますが、まずそこをそれぞれの学校でしっかり取り組むことが、やはり子どもたちが学びに向かっていく姿勢ができるどころかと思っています。

それから、中学校では、総合的な学習の時間が、2～3年で年間70時間、1年生は50時間あります。総合的な学習の時間ができ始めた頃は、各担任が自分が興味のあることを地域に出ているいろいろなことを学びながら、こんなことをしたいという学びを行っていたものですが、今は少し忙しくなって、学年総合や学年で同じことを行うかたちが多くなってきています。その辺で、先生方がやりたいことが見つかるような余裕のある時間ができるといいのかなと思っています。

ですから、現状の中学では、まず1時間の学びを充実させるということと、総合的な学習の時間だとか、校内にある時間を工夫しながら、探究的に学べる、自分で決めて学べるという時間をつくり出していくことが必要ではないかと思います。もちろん教員それぞれの研修なども必要だと思うのですが、やはりそれには時間が必要かと思っています。

それから、先ほど不登校であるとか、支援が必要な生徒という話がありました。もちろん本校も不登校や支援が必要な生徒は増えています。どこの中学校も増えているかと思えます。もちろん校内に中間教室や学びの教室もやっているわけですが、なかなか担当する先生がいないので、生徒の選択肢も増えていかないこともあります。

校外でもと考えていますが、そういうところもないので、今、県で業務支援員だとかいろいろ工夫をさせていただきながら教員の働き方改革をやっていただいたり、この頃のニュースでは、文科省でも働き方改革について方策をとることがあるわけですが、やはり必要なのは、生徒の中に入って指導ができる先生の数が増えることで、いつも相談室、中間教室の子どもたちと関わりながらその点について思っているところです。

あと、先生方の負担ということの一つに、今、部活の改革もあります。放課後、もう4時になって生徒がいなくなったら、もう先生方の仕事はない、生徒に関わる部活動もなくなって自分たちの時間が持てるというかたちに今後はきっと進んでいくと思います。土日の地域移行を県でも中心にやっていただいています。そんなことも働き方改革として進んでいくと、先生方が時間に余裕があるということになり、子どもたちの魅力ある学校づ

くりにとっても大きな影響があるのではないかと考えています。

なかなか現実から離れられない話ばかりで申し訳ありませんが、よろしくお願ひいたします。

○荒井座長

ありがとうございました。

では、続いて、三木委員、お願ひします。

○三木委員

須坂市長の三木と申します。よろしくお願ひします。

この委員からの意見の取りまとめ資料を見させてもらって、すごく分かりやすいと思いました。先ほど知事もおっしゃったように、教育は全ての行政の基本だと私は思っています。ですから私は、市長就任以来、例えば市民から教育の問題の話がありますと、教育委員会のほうに投げます。私は市長という立場で教育委員会も市役所の一部だという考えで、もちろん教育委員会を尊重しますが、別の考え方ではやっておりません。

したがって、例えば支援学校設立のときに飯田養護学校の校長先生にお世話になったのですが、支援学校を作るというのは私の案でした。そして保育園を教育委員会へ持って行って小学校と連携を取るというのも私の案です。

そうしたことによって、今、保育園と小学校と中学校の一つの流れができています。そうすると保育園のときにいろいろな課題なり特色のあった子どもを小学校に引き継げるようになります。保育園の先生が小学校の運動会に行ったり、小学校の先生が保育園の運動会に行ったりしています。

私は、先ほど知事がおっしゃったように、教育というのは行政の中の一番大事な部分でありますので、お互いにそれぞれの分野で協力することが大事だと思っています。

それから、教育県長野だとか、信州教育を調べてみますと、学校だけではないのです。先ほど会長がおっしゃったように、地域の人たちが先生を尊敬しているのです。地域の人たちが先生方を手伝っています。ですから私は、これからは公民館活動も、そういう面ではしっかりと取り組まなければいけないと思っています。

それからもう一つ大事なものは、先ほどもお話がありましたように、退職した先生方の話を聞きますと、すごくやりがいがあったというお話を聞くのです。ところが、マスコミの報道等ではブラック企業だと言うのです。ブラック企業という意味合いは二つありまして、本当にやりがいのある仕事していて時間的にある程度制約されているのか、そうではなくてやりがいのない仕事で時間的な拘束があるのか。私どもがしなければいけないのは、やりがいのない仕事で時間的な拘束をしないことであり、拘束するということはおかしいと思っています。教育県長野を取り戻すためには、私は地域全体で様々なことをすべきだと思っています。

それから、ぜひお願ひしたいことがあります。教育は自前主義や完璧主義でやるものではないと思っています。我々も行政もそうですが、無謬主義、間違いを犯してはいけないということでもありますので、積極的な仕事ができないのです。例えばマイナンバーカードを取り上げますと、マイナンバーカード自体は必要です。ただそこに人が絡むことによっ

て、入力などのミスがあります。マイナンバーカードのシステム自体は全然問題ないです。しかしながら、一つか二つミスがあることによっておかしいということになってしまいましたので、ぜひ先生方においても、完璧主義だとか、自前主義だとか、無謬主義ではなくて、もっと大らかに見ていただきたい。

それからもう一つ、全国の会議でもあったのですが、保護者にとって何か先生が気に入らないことがあれば、教育委員会へ言いつけるとか、教育長に言いつけるとか、そう言われることがあるのです。私はそのときも言ったのですが、ぜひ言いつけてくださいと、必要があったら市長にも言ってくださいと。でも、実際はほとんど言ってきません。先生方をクレームから守るような仕組みづくりが大事だと思います。

それからもう一つ、長野県教育で一番大事にしなければいけないのは自然教育だと思います。この間、海老名市の子どもたちが須坂市の峰の原高原に来て、初めて木登りや虫を捕って喜んでいました。

私は自然教育をやっていただきたいです。そのためには先生方に自然のすばらしさを味わってもらいたい。先生方自身にアウトドアの経験がないと、なかなかその良さが分からないものですから、ぜひそういう面でもやっていきたいと思います。

そして県だけでやるのではなく、市や町村やそれぞれの団体が、お互いに協力しながら、この長野県の教育を考えていくことが大事だと思っています。以上です。よろしくお願いします。

○荒井座長

ありがとうございます。

では、続いて、三輪委員、お願いします。

○三輪委員

こんにちは。松本市立波田小学校の校長の三輪千子と申します。よろしくお願いします。

私もずっと長野県内で教員をさせていただいています。特別支援学校を皮切りに、中学校、小学校、それから院内学級でも教える機会をいただきここまで勤められていることが、今になってみるととてもいろいろな経験をさせていただけて、幸せだなと振り返っているところです。

今、三木市長からも話がありましたように、小学校に勤めている中で今一番感じているのが、小学校でつけなければいけない力と言われたときに、私は感じる心ではないかと思っています。感じる心、見つける目、ひらめく志向、非認知能力とひとまとめにされるととても大きな力のように思ってしまうのですが、そういう気づく目、何かそういう人にしかないような敏感さを育む時期が小学校ではないかなということをしごく思っているところです。

松本市では、「教育に遊びや体験を」というキャッチフレーズで、予算を配当していただいていたタブレットもみんなそろっていて、先生たちも一生懸命それを使いながら授業をしているのですが、子どもたちの口からよく出るのは、「先生、外行こう」ということです。「先生、外行って遊びに行こう」と言うのです。

それは、何かと出合いに行くとか、何かを探しに行くとか、そういった言葉にはならな

い、彼らの中にある面白さ、学びの真実と私は思うのですが、何かそんなことをすごく感じています。

高学年から中学校になると、そんなことを組み合わせて自分でも学びを調整していく、そういうことが進んでいくと思うのですが、その探究の源というのは、ずばり私は人ではか持ち得ない、そういう感覚ではないかと思っているので、異学年・異年齢の交流であったり、外で何かを探したりできるのだったら、お日さまの下へ行けるようなことが一日に一回あるといいねということを書いながら勤めているところです。

ただ、そうしようとしても、今、本当に多様なお子さんたちがいます。多様なお子さんたちのその向こうには、また多様な価値観の保護者の方がいるわけですが、そんな中でも、みんなでよりよいというところを目指して行くには、私も校長ですが、これまでであった校長、教頭、教務主任みたいなそういう枠ではなくて、みんなと一緒にというようなことをどこかから示さなくてはいけないということをととても思っています。

一番苦しい子に寄る、校長自ら一番苦しい子に寄って、私もその子に関わることで学んでいるということを実感したり、その姿を先生たちから評価してもらって、「いや、ちょっとそれはやり過ぎじゃないでしょうか」とか、「そこはこうしてほしかった」みたいなことを語ってもらうこと、そんなことが私にとって今の一番の刺激でもあります。

そこは一つ人権感覚でもあると思うので、大事にしたいなと思いつながらいるところですが、教師との出会いがやはりその子の人生の一つ一つの節になるような、そんなことを考えたときに、先生方も一人ひとり違ってよくて、こんなことが得意で力があって、こんなことをやってみたいということを押していける自分でありたいと思っています。

そんなことを考えたときに、教育課程の弾力化といいますか、学校もいろいろな学校があります。うちも大規模ですが、ちょっとよそを見ると15人、30人というような山の学校があるわけです。でも山の学校の先生がうちの学校のことをいいねと言います。なぜかという若い先生がいっぱいいるからです。山の学校には本当に豊富な自然と地域が大事にしてきた文化などがあって、外国からものすごく注目されているにもかかわらず行く人がいません。

どんなに勧めても、今、若い方も本当に経済的に苦しい面があります。奨学金を返しながら勤めているとか、そういった先生たちは山へ通うことは難しいです。だけれども、若い者でなければ子どもと近い感覚で新しい発想が生まれなかったときに、何とか私のところでしたら、上高地や乗鞍などの地域、あるいは地域のお祭りなどがあります。そういうところへ関わっていけるように根を下ろして、その魅力を教育として子どもたちに伝えて広げていかれるような、そんな仕組みづくりが進まないかなということも思っています。子どもにとっても特別な教育課程が広がって、特支に入級しているお子さんでなくても、その子に応じたカリキュラムを工夫してやっていけるような形ができないかなということを感じながらやっております。以上です。

○荒井座長

ありがとうございます。

では、対面参加の最後となります。村松委員、お願いします。

○村松委員

よろしくお願ひいたします。信州大学教育学部の学部長をしております村松です。いつもお世話になっております。

この教育振興基本計画、荒井座長からお話がありましたけれども、まとめさせていただいた1人としまして、本当にこういうすばらしいものが出来上がってきて、いよいよこれを形に、具体的なものにしていく、そういう段階に入ってきたことをうれしく思います。

いただいたテーマの資料について、今回取りまとめをお願いできるということでいっぱい書き過ぎてしまいましたすみません。

ポイント的なところでいきますと、やはり皆さんいろいろ御意見があると思うのですが、そもそもここで何を指すべきなのかということ、方向の軸合わせが必要ではないかと。そうしないとせっかくそれぞれ皆さん御意見をいただいても、それが拡散的で、建設的なものにつながらないということを心配しております。

そのときに、私のほうで、あるべき姿、思いとしてあるのは、信州を育てる学力を育てる、そのための探究県としての長野ではないかと考えました。これは、先日座長を拝命しております「特色ある県立高校づくりの懇談会」が、知事、教育長も御出席の下であったのですが、非常に難しいけれども、興味深い議論がありました。

地元の産業界が学校教育に本当に熱心にコミットされていて、地元で支えるために地元や長野を大事にする、こういうことを教育として明示してくれと、こういう御意見がありました。一方で、長野で学ばれたけれども現在海外で御活躍されている委員から、教育は個々の可能性を拓くものであって、地元や国を押し付けるものではない。だけれども、自分は今長野を離れているけれども、そこにアイデンティティーを持っているんだといった声がありました。こういう議論をオフィシャルの会議でできる長野県はすごいなと感じた次第です。

私自身それを聞きながら、この資料にも書かせていただいたのですが、学校教育関係の方は御存じだと思うのですが、70年ほど前の東井氏の「村を育てる学力」における生活つくり方とか、作文などの話を思い出しました。

当時70年代頃、高度経済成長で、山村などの貧しいところからどんどん都会へ出て行ってしまふ。そこで学力をつけても、それはどんどんみんな都会へ行って村を捨てていってしまうのではないかと。これは村を捨てる学力になるのではないかと、そういう問題提起をされたんですね。

それに対してこの東井氏が書かれたのが、そうではなくて土への愛だと。村を愛することができるようになるなら、さらに国も愛してくれるだろうと。それがたとえ村を出て行っても、行ったところで生きがいを見つけて切り開いていくという話があって、先ほど武田先生の言われた農村教育にも通じるころがあるのではないかと思いますけれども、この東井さんが言われているのは「村を育てる学力」、村の停滞性を突き破っていき、新しい生産様式を切り開いていく、そういう学力が必要だということです。

70年たった現在、もちろん私たちの生活は豊かになったのですが、今は長野だけではなくて、日本を取り巻く現状というのは、実は非常にオーバーラップするところがあるのではないかと感じるわけです。本日、参考資料で県からお出しいただきましたけれども、年代別の人口流出がありました。18歳もそうですし、10代、20代の人口流出の多さですね。

とりわけ女性が多く、母がいなくなってしまうということになります。それは長野県の危機だけではなくて、いろいろなニュースでも、もう日本を離れて海外のほうが、同じ仕事だったら給与もいいよとあって、海外に出稼ぎに行く、自分の村だけではなくて、日本そのものを出て行くような動きまで出てきている。そういった中でこの話というのは、改めて考える必要があるのではないかと考えています。

そう考えたときに、信州を育てる学力と捉え直して、それは別に信州に縛りつけるという意味ではなくて、信州にアイデンティティを持って、信州、日本、さらには世界の停滞性を突き破って新しい社会を切り開いていく、こういう力を持った子たちというのが、個人と社会のウェルビーイングの実現につながっていくんじゃないかと。

このコンセプトブックの「一人ひとりの『好き』や『楽しい』、『なぜ』をとことん追究できる」、その先にあるのは、タイトルにある「未来をつくる、学びでつくる」ということであり、それは本当に個人と社会の幸せにつながっていくのではないかと感じた次第です。

そのためには、ここで掲げている探究の学びというものが不可欠でございますし、先ほど三木市長もおっしゃられていますが、地域を挙げて、学校のみでなくという、いろいろな皆さんが連携し支え合っていくような取組が必要でございます。

そして何よりも、現場で子どもたちと向き合う先生方を支える体制。先ほど徳永先生からフィンランドのお話がありましたけれども、私もフィンランドを実際見て、本当に同じく感じるところであります。

実際に教員養成を取りまとめる立場で、まず教員養成を志望する子たちが減ってきている。倍率も非常に年々厳しくなっています。そして出口で、入っても志望する子たちが少なくなっている。ですのでこれは、どれだけいろんな学校を整えても、それを担う子たちが、次世代が、本当に危機的な状況にあるということを感じています。

そういった点でも、先生方を支える支援体制が急務だと思いますし、先ほど阿部知事のほうから予算をつけていただける話もありましたので、ぜひこういう具体的な施策につなげていながら、いろいろなところが各所連携して、何よりも現場で子どもたちに向き合っている先生方を支える仕組みを構築していくことが大事だと考えています。

以下の3点につきましては、また次のテーマのところでお話しさせていただければと思います。以上です。

○荒井座長

ありがとうございました。

続きましてオンライン参加の2名の委員の方からお願いします。

大久保委員からお願いします。

○大久保委員

よろしく申し上げます。根羽村長の久保です。

私のほうでは、特に常日頃思うことは、地域に誇りと自信を持って生き生きと生活できること、これをまずベースに大事にしていきたいということが基本です。特に次代を担う子どもたちのためには、この学校というのは、恵まれた環境で地域にはきちんと持続をし

ていく、そういった仕組みを我々はつくらなければいけないということを常日頃思っているところであります。

そうした中で、根羽村は人口が約840人ですが、令和2年に1年生から9年生まで一貫した教育を行う義務教育学校の根羽学園を開校したところです。あわせて、学習や体験、自学を意識した村営塾も開設したり、もともとあった放課後子ども教室、それらを根羽学園と連携する中で取組を進めているわけです。

そうした中で、常日頃私が考えていることは、やはり学力を高めることは基本的にはすごく重要なことだと思いますけれども、まず人としての学びや関係づくりができることが非常に重要であると思っています。

特に自分たちの住む地域ならではの地域の教育を通じて地域に関心を持ったり、地域に関わったり、将来にわたって地域や人と関われる、そういった関係づくりがこういった場所で育まれるといいなと思っているところです。

あわせて、一人ひとりの個性や様々な多様性を持って柔軟に対応できる、そういった学びの場や学べる環境を整備していく必要があると思っています。

特に学校の中だけで教育を考えるのではなくて、地域の人は民間の力を積極的に取り入れて、多様な連携による取組がこれからの人を育てるためには大変重要であると常日頃思っているところであります。

そうした中で、先ほども言いましたけれども学力の強化はもちろんですが、人づくりの観点から見ると、学校と家庭のみで子どもを育てるのではなくして、地域全体で教育を担っていく、人を育てていく環境づくりがとても大切になってくると思っています。地域が子どもを育てるとともに、子どもたちが地域を育てて、お互いが育て合える環境、そういった地域になるといいなと思いつながり、日々いろいろな取組をしているところであります。

また、もう一点、中山間地域にある学校をを見る中で、課題となっていることは、先ほどもお話がありましたけれども、我々としては、やはり教員不足、先生方の不足ということ。それから複式学級の緩和、特別支援員の配置基準の緩和等々もお願いしたいと考えており、現場では、特に中山間地域ではそういった問題が非常に切実になっていることを申し上げたいと思います。以上です。よろしく申し上げます。

○荒井座長

ありがとうございました。

では、続いて、篠田委員、お願いします。

○篠田委員

松川町のNPO法人Hug代表の篠田と言います。よろしく申し上げます。

私は最初、通信制高校の教員を県外でやっていました。その後、故郷の松川町に帰ってきまして、教育支援員として現場の小中学校に入らせてもらい、その後松川町の教育委員会で地域と学校を結ぶ地域コーディネーターの仕事をしていただいて、その後独立しまして、今NPOを始めて、フリースクールの運営や子ども食堂や多世代が交流できるカフェの営業、放課後の学習のサポートなどもやっています。

今日は本当にすごい方たちの中に入れていただいて、とても光栄ですし、とても恐縮です。いろいろ勉強させていただければと思います。

私が日々子どもたちと関わっていることは二つあるのですが、一つは、環境調整がやはり大事かということをととても感じます。環境調整は選択肢にもつながってくるかと思いますが、いろいろな特性を持っているお子さんとか、学び方の違う子どもたちとかというのは、本当に今の時代たくさんいる中で、学校の中と外からどんな環境を調整していったらいいのかということについていつも考えながら活動をしています。

二つ目は価値観の変容というところです。やはり教育という世界の中で、こうでなければいけないとか、集団の中ではこういうふうに行動するべきというところで苦しんでいる子どもたちもたくさんいますし、それに乗せられないことで苦しんでいる保護者の方もたくさんいると思います。その中で、今後の未来を考えてどう周りが価値観を変えていくか、そんなシステムをつくっていくかが二つ目に大切なことかと思っています。

私たちは民間団体ですので、学校の外から子どもたちのためにサポートしていくという立場ですが、私たちの町も1万人少しの小さな町ですが、自分の地域でできることからまず始めていくということを大事にしていて、町内の学校や、場合によっては他市町村の学校ともつながりながら、子どもたちの多様な学びをつくっていくことは大事にしていることのひとつです。

その中でいろいろな活動を日々やるのですが、外に行ったり、中で学習したりという中で、教育の世界、特に不登校の子たち、フリースクールをやっていて教育の世界だけではなくて、福祉とか医療とか、本当に将来的な自立を考えるといろいろな分野と複雑に連携しながら動いていかないと、いい方向には絶対行かない分野だということを感じています。

そのため、いかに学びの場を地域の中から大きくしていくかということや、その可能性をどう広げていくかということについて、日々民間としては考えながら運営をしています。

将来的なゴールは、やはり自分の良さや自分が持っている力を社会の中で少しでも伸び伸び生き生き発揮できるような、自立の形が一番のゴールだと思うのですが、そのための地盤をどうつくるかが学びだと思うのですが、その中でNPOとしてできることを、日々考えて運営しています。よろしくお願いします。

○荒井座長

ありがとうございました。

ただいま13名の委員の方から、課題意識を発表いただきました。

ここで10分ほど休憩を挟みまして、次に、あるべき姿を実現するためにどのようなことが必要なのか、また、何が制約になっているのかについてご発言いただき、改めて課題の共有をしていきます。

では、今2時45分ちょっと前ですので、10分ほど休憩を取りたいと思います。よろしくお願いたします。

【 休 憩 】

○荒井座長

では後半、再開させていただきます。

前半では、皆さんから様々な課題意識を御発言いただきました。第4次教育振興基本計画で掲げている「個人と社会のウェルビーイング」に対しては、とても共感的に受け止めていただいていることが確認できました。特に、お配りしている「コンセプトブック」にあるように、個性あふれる多様な特性を持つ子どもたちの一人ひとりに寄り添って、「好き」「楽しい」、あるいは「なぜ」といった、子どもたちの感情に向き合っていく、こんな教育者でありたいという点が共有できたのではないかと思います。

私なりに整理させていただきますと、改めて「探究県長野」というフレーズを実質化していく、実装していくために何が必要なのか、この問いに対して、皆様方からは、学校の自律性、自由度、主体性を尊重していくことが非常に重要だということが確認されました。

また、組織としての学校の構成員である学校の教師の自律性や自由度、主体性を高めていくことも極めて重要だということが確認できたのではないかと思いますし、そのために求められる教育行政のあり方も再検討していく必要がある、こうした問題意識は互いに共有できたのではないかと思います。

子どもたちの選択肢を増やす、そしてその選択肢を支えるための仕組みを考えていく、また、何が制約となっているのかは引き続き議論していきたいと思いますが、教育関係者という点では、教師に対する「エンパワーメント」ですね。自律性を促進し、能力開発の機会を保障していくことを意味していますが、学校の自治を高めていくことと、教師の自由度を高めていくこと、それを支えていく地域のあり方を展望していくことについてご意見を頂戴したいと思います。

このように、皆様が描く未来像は、まとめられるのではないかと思います。知事としての受け止めに、一言いただけますか。

○阿部知事

どうもありがとうございます。メンバーの皆様からそれぞれ御発言があり、今、荒井先生からも基本的なところをまとめていただきました。

私自身も、やはりまず子どもを中心にしながらも、もっと分権的な仕組みにしていく必要があるのではないかと考えておりますが、荒井先生におっしゃっていただいたように、ほぼその方向で皆さんお考えということは、私も改めて確認できて、細部は別として、大きな方向感是一緒ではないかと思いました。

そうした中で、学校の先生の多忙化をどうしていくかという話だとか、地域の皆さんとの関係性をどうするかという話だとか、学校の施設も老朽化しているので何とかしてほしいという話だとか、一般行政の部分だったり、予算的な部分で私に関わらなければいけないところもたくさんあると思ってお話を伺いました。

1点だけ私の感覚で、どうしてこれを事務局でやっているかということの考え方にも関連するのですが、私は、より学校に主体性を持っていく、あるいはより学校の先生方が主体的に行動していく上では、先ほど荒井先生が触れた教育行政のシステム自体を考えていく必要があるのではないかと考えています。

私も学校の先生方といろいろお話をさせていただくと、先ほどもお話あったように、皆

さん本当に意欲もあるし、子どもたちのために頑張りたいと思っているわけです。しかしながら、一つは国からいろいろな通知が来たり、学習指導要領でこれとこれはやらなければいけないということに縛られたり、あるいは各学校のこれまでの積み上げで、何月はこれをやらなければいけない、学校の先生はこういうことが期待されているということで、もうがんじがらめにされてしまっている部分があるのではないかと思います。

そういう意味では、教育のシステム全体を見直す中で、これは皆さんほぼ同じ方向性だと思いますけれども、学校がそれぞれ自主的に自律的に運営できる、また学校の先生がそれぞれの皆さんの思いを基に主体的に行動できるようにしていくということが重要だと思います。

そういう意味で、私としては、やはり「学校の自治」をもっと高めていくということ。それから、先生方の主体性をもっと持ってもらえるようにしていくことが重要だと思います。

そのときに、お話にも出ていましたが、やはり私は自治の仕組みをつくる上でマネジメントの問題が非常に重要ではないかと思っています。学校の自治権、自律権を高める上では、どういう意思決定をするのか、あるいは地域の皆さんとどう関わっていくのか。あるいは今までは学校の先生方はどちらかというといろんなことをやらされながらも、学校の中の世界を見ていますが、例えば先ほどの予算の話言えば、私も幾つかの学校を回って愕然としたのは、学校の予算を増やすのに保護者の皆さんから県に要望してもらったりしているんですね。本当はこの教育行政のシステムの中で、もっと現場の声からしっかりと予算編成プロセスの中に反映できるようにしなければいけない。

これは我々の宿題であり責任でもあります。そういうことも含めて、学校や先生方を取り巻いているこの教育のシステムをどうしていくかということにかなり踏み込んでいかなければいけないと思っています。

あと、今度フリースクールの認証制度をつくっていきますけれども、学校だけが唯一絶対の学びの場、しかも学校教育法に定めた学校だけが唯一絶対の学びの場であるというような考え方をもう少し柔軟にして、いろいろなところで、校外での学びもあれば、いろいろなところで体験することも学びとして位置づけるとか、もう少し学びのあり方自体も考えていく必要があると思います。

そういう意味では、こういうことが可能かどうかというのはありますけれども、私は「信州版学習指導要領」みたいなものをつくって、もっと国の統制から自由に長野県の教育のあり方を考える必要があるのではないかと。

これはなぜかと言うと受け身になってしまう。私はこの間中教審が出した教員の皆さんが多忙だから何とかしましょうという提言、別に悪いことではないとは思っていますけれども、常に国が考えて国が通知してきてそれに従って現場が動くという、この仕組みこそ考えないと、いつまでたっても学校の主体性とか学校の自治というのは永久に確立しないと思いますので、その辺の考え方も転換させていく必要があるのかなと思います。

武田会長がおっしゃった長野県信州教育はそもそもこうであったというのは非常に重要な話だと思っています。そういう学校の個別性、主体性、先生方の主体性、自主性、こうしたものをぜひもう一回しっかり皆さんと、取り戻せるように考えていけたらと思います。よろしく願いいたします。

○荒井座長

ありがとうございました。

委員の皆さんの課題意識と知事の問題意識は、相当程度重なりがあることが確認できたので、座長としては安心しております。

そのことを踏まえて、分権型教育行政システムという論点も出ました。また、学校の個性化を進めていくために何が必要かという論点もあります。さらに、学校それ自体を魅力化していくこととともに、子どもたちの当事者目線を踏まえた場合、学習環境を魅力化していくための施策展開も必要ではないかと考えています。

お配りいたしました資料には、あくまでも例ではありますが、皆様方からあらかじめいただいた御意見を踏まえて論点整理の叩き台を示させていただいております。

一つ目は、子どもたちの学びの選択肢のあり方に着目した場合、どのような選択肢の増やし方があり得るのか。また、増やただけでは格差社会における逆機能の問題が生じますので、どのように格差是正の手当をしていけるのかという論点も重要となります。このような観点から、「子どもたちも学びの選択肢の拡大のあり方」と整理させていただきました。

続いて、2点目は、「子どもたちの学びを支える教育関係者のあり方」です。学校関係者を主としたものになりますけれども、昨今学びを支えていく主体は学校関係者にとどまらず様々な立場の様々な関わり方があります。これを踏まえて「教育関係者」と捉えた場合に、どのような関わり方が求められるのか、再定義が必要になると思われま

す。そして、3点目は、まさに先ほど「学習環境の魅力化」という言葉を使わせていただきましたけれども、「子どもたちの学習環境のあり方」という論点です。

残りの時間を使って、描く未来像に対して、何が制約となっているか、今日はせつかくですので、具体的なアイデアも提起していただいて、次の議論につなげていくとともに、県民の皆さんとの対話のきっかけづくりにしていけたらと思います。いかがでしょうか。

○岩瀬委員

知事のほうから学校の自治という言葉をお聞きして、本当にそれが広がっていけば、学校が変わっていくなと思います。

風越学園のチャレンジとか、白馬でのチャレンジが、公立校で普通に起きてくればいろいろなことが起きるわけで、じゃあ、そういうチャレンジを阻害しているものは何かということをお僕なりに整理して話をしてみたいと思います。

一つ目は、教員の自律性が先ほどからキーワードが出ています。教員が真の専門職として力を発揮するための、自律性を支える仕組みが弱いのではないかということです。教員が自律的に学ぶためには自律的に学べる研修など、具体的な支えは必ず必要です。さらに私たちは1万数千時間の被教育体験の中で、学校とはかくあるもの、教育とはかくあるものというのを身体化しています。ですから新しい学び、探究的な学びであったり、学習者主体の学びにチャレンジしようと思ったときに、自分の実感として伴わないことを実践する難しさがあります。それを越えるための先生たちの学びをどうつくっていくか。

たぶん今までの研修のあり方から一步先に進むようなもの。教員自身が自律的な学びを

自主的につくっていきけるような仕組みというものが弱いということが一つ目です。

ここにはやはりトップダウンで変化を求められます。そこに対応するという学びになってしまおうというような、結果として受け身にさせてしまっているというような弊害があるのではないかと思います。

二つ目は、学校の自律性が保障しにくいということです。魅力的な学校をつくりたいと思っている校長先生は多いと思うのです。でも、それをするための手札が少ない。例えば予算。先ほど徳永さんがおっしゃっていましたが、予算がないということ。これは圧倒的にやれることの幅が狭まってしまいます。自由に裁量で使える予算と人事権が校長にある程度あるということが重要です。

あるいは校長の任期の問題もあります。3年程度で本当に目指したい学校をつくるのはものすごく難しいことで、先ほど武田先生から「学校の人格」というお話がありましたが、学校に人格ができるためには、本当に5年10年と、そこにいるリーダーなり実践者が、本当に汗水垂らして泥臭くつくり続けるという自由なしには学校はつくれないので、もしかしたら、その校長や教員の任期や人事権というところも課題ではないかと思います。

三つ目は、そういう探究を支える学習環境が弱いということ。GIGA スクール構想で端末は入りましたけれども、探究の学びを支える上で、今日凶らずも長野県立図書館でやっていますが、学校図書館の役割が非常に重要であると考えています。学校図書館がそういう探究の学びを支える学習センター的な役割を果たしていくということは、もう一度考えるべき論点だなと思っています。

ところが今、学校司書も専任ではない。司書教員も一応必置では置かれていますけれども、大体兼任で置かれていて、実質の仕事はできないというのが現状。探究を支えるラーニングセンターとして機能すべきところに人が配置できていないという問題もあると思っています。

四つ目は、これも先ほどから出ていますけれども、そういう学校を守る盾がない。盾が弱いということです。多くの人が学校を経験しているので、みんな学校総評論家です。学校が新しいチャレンジをすると、それは何かおかしいじゃないか、危ないんじゃないか、違うんじゃないかみたいなことがバンバン寄せられていくから新しいチャレンジがしにくくなっていく。

社会の認知は随分変わってきていて、学校は変わっていくというのはある程度社会的合意になっています。今回長野県から出た振興計画も、本当に新しい形を県として示すという後押しができていっている中で、このチャレンジを学校がしていくということを守っていく盾の存在が、結構弱いのではないかと考えてます。

そういう意味では、先ほど分権という話がありましたけれども、市町村教育委員会がどういう役割を果たしていくのかということは、もう一度考えたいところです。学校が新しいチャレンジをするパートナーとして、共に汗をかいてサポートしていくというような、何か新しい専門性が市町村教育委員会や指導主事には求められているのではないかと考えています。

あと、お金の件に関していえば、金を出すけれども口は極力出さないというのは、結構大事だと思っています。金も出すけど口も出すと、やはり新しいチャレンジがしにくくなっていく。小さい成功と、中くらいの失敗をたくさん重ねながら新しい学校というのはつ

くられていくなど、日々学校づくりをしていて実感しますので、そういう試行錯誤の余地みたいなことをいかに残せるか。その試行錯誤の余地がものすごく少ないのではないかと思っています。

五つ目は、高校入試がとても大きいなと思います。中学校がなかなか変化しにくいのは、その出口の高校入試に対応しなければいけないのが、先生たちのマインドを規定している。高校入試が変わることで中学校で新しいチャレンジがしやすくなるのではないかと思います。

僕としては、この五つを論点にしたいと思います。以上です。

○荒井座長

ありがとうございました。少し確認させていただきたいと思っていますが、一つ目の教員の自律性を支える仕組みづくりという点で、研修の論点が出ました。研修のあり方として、「コンテンツ」の問題と「機会」の問題があると思います。学ぶべき内容、学ぶ頻度などについては、どのようなイメージを持たれていますか。

○岩瀬委員

まず一つはコンテンツとしては、一斉授業を行うための方向なり学びはある程度、様々な実践や研究を通してこれまで体系化されてきています。ただ、探究の学びを実践するためとか、学習者中心の学びを実践するために、どういう学び、どういうスキル、力量形成が必要なのかということは必ずしも明らかにされていない。

ですから、新しいチャレンジをしたいけれども何をどう学んでいいかわからないという課題が一つあります。

二つ目は、どうしても研修は悉皆になってしまったり、全員が受けなければいけない研修になってしまったり、この研修は研修として認められるけれども、民間でやられているような様々な研修は研修としては認められないみたいなこともあるので、もっと幅広く教員が自律的に学んでいくということを応援するという機会の創出が必要なのではないかと思います。

三つ目は、僕が初任の頃、まだ戦後の民間教育運動の名残がある頃で、僕は埼玉県の狭山市に住んでいたのですが、地域に五つも六つも学習サークルがあったんです。週末のたびにそういうところに行くと先輩たちがいろいろな実践を持ち寄って検討し合うみたいな、自分たちで学ぶみたいな文化がありました。それが日本の学校教育を長らく支えてきたと思います。

でも様々な社会的要因も重なって、そういった教員が自主的に学ぶという文化が著しくなくなってきています。そこで、改めてそういう教員が自主的に学ぶみたいな文化をどうつくっていくかというのが、教育行政からトップダウンでボトムアップを起こすような仕組みづくりというのできるのではないかと思います。

ラーニングコミュニティのようなものの創出。教員はそういう学びを求めていると思いますので、そういうボトムアップで学べるような機会を設置していくという三つがあるのではないかと思います。

○荒井座長

ありがとうございました。

教育振興基本計画の中でも、「共同探究者としての教師」の存在が指摘されています。この共同探究者としての教師の資質・能力論の議論はまだ深まっていない部分があり得ますが、武田委員のお立場からは、このような教師のあり方や資質能力について普段どのようなことにお感じになられていますでしょうか。

○武田委員

先ほどお話したように、長野県の教師というのは、かなり自主的に学んできたと思います。過去においてと言ったほうが正確かもしれないのですが、

長野県では、いわゆる悉皆研修とか法定研修、あるいは市町村教委が全員に悉皆というか、やらせる研修が少ないです。それは、例えば長野県の総合教育センターにおいても、ほとんど選択研修になっているので、先生たちが自分ほどの研修を受けようか選んでいく。そういう仕組みの中で行われてきました。

今、岩瀬さんの話を聞いていて私も全く同感に思うのですが、長野県には、各教科、例えば理科ですと信州理研とか、社会ですと信州社研とか、それぞれの同好会、研究会がございます。これがかなり先生たちの自主的な学びの場になってきていたと思います。

ところがここ 30 年ぐらいで、各同好会、研究会に入っている県内の小中学校の教員の数が3分の2に減っているそうです。ですから 30%減っていて、今、全部足し上げてても 5,000 人ぐらいしかいないんじゃないかと思います。

これはいろいろな要因があって、例えば同好会・研究会に入ったときに若い先生たちがレポートを持っていっても、年配の方々がそれを厳しく叱責してというようなことがあったり、そういういろいろなことがあるんですけども、あるいは私どもがやっている信濃教育会というのも自主的に入って学んでいくというところできています。

先ほどの予算の関係の話をしておきたいのですが、県内にあった各種の同好会・研究会に、かつては長野県教育委員会から助成金が出ていました。平成 15~16 年ころに一切やめてしまいました。現在信濃教育会が各同好会などに助成金を出しています。ですので、お金のことから言うと、今の議論は先生たちの主体的な学びとか自主的な学びを支える仕組みをどうしていこうかということですが、歴史的には、県はそういうお金を出すのをやめてきたという経緯があるので、やはりそういうところをもう一度見直す。

ただ、同好会や研究会自身も、信濃教育会でもそうですが、どちらかというともだまだ古い体質が残っていて、新しい時代に向かっていく同好会であったり、あるいは研究会であったり、教育会であったりというのは変えていかなければいけないと思います。

それは先ほどから出ている学校において、校長がマネジメント力を発揮して、新しいものをつくっていくというのと同じことが、例えば同好会の会長であったり、教育会の会長に求められていると思っています。

○荒井座長

ありがとうございます。

学校の個性化、あるいは魅力化の手札の話が出ました。先ほどの知事の御発言も考慮す

ると、権限を現場に移譲していく方向性に関わるかと思います。とはいえ、権限と一口に入っても、ヒト・モノ・カネ・情報など様々な権限がございます。教育関係者の皆様にぜひコメントをいただきたいのは、どのような種類の権限の移譲が教育現場のニーズなのか、この点はいかがでしょうか。

では、お願いいたします。

○浦野委員

本校で5年後10年後の飯田養護学校の寄宿舎とか、飯田養護学校がどうなっているかなということを先生方に考えてもらっているんですが、先ほど岩瀬さんが話をしている中で感じたことが一つあったんですが、どうしても教員とかは枠の中で考えるので、自分自身が枠の中で考えているということも気づかない。本当に教員はある面で言ったら、ずっと学校にしかいないんですね。小学校、中学校、高校、大学、大学を卒業してから教員なので、学校にしかいないので、学校の中の枠って何ですかと言われてもそこにすらなかなか気づかない部分もあったりします。

そこを飛び越えて本当は考えてもらえるといい、5年後10年後、こんなふうな学校に、また、子どもたちの実態がこうだからこういう学校になっているといいねと考えたときに、どうしても予算的なものが必要になってきます。

その際には、こういったものの環境が必要であるとか、宿舎であれば、こういうふうな施設があったらできるねというようなことを一生懸命考えてくれたり、今しているんですけども、ぜひそれを実現するためにも、校長に財政的な裁量権があると大変ありがたいなと思います。責任は重くなるなということは感じつつはありますが、本当に子どもたちにとって、この学校でしかできないような教育を実現するというのが、教員が考えてそれが実現できるという形になってきたら、教員の裁量権、自主性、自律性というのはきっと生まれてくるのではないかなと。

今の中ではどうしてもこの枠の中でやらなきゃいけないということがありますので、そこをどうやって乗り越えていくかということが、今感じているところでございます。

○荒井座長

分かりました。ありがとうございます。

このテーマ、ほかはいかがでしょう。

では、最初に三木委員から、お願いします。

○三木委員

先生の自律性とか学校の自律性ということが出たのですが、予算だとかそういうのはおっしゃるとおりだと思うんです。ただ、私は最終的には、以前、文部科学省の方に聞いたことがあるのですが、文部科学省でいろいろ言うけれども、本来的にはそれぞれ自治体の教育委員会ですらほとんどできることだと。ただ自治体は文科省がどう言っているかと顔を見ていると。私どもの話を聞いていても、県の教育委員会でどういうふうに言っていますかとか、国の文科省でどう言っていますかということを使う人が多いです。

先ほど知事がおっしゃいましたように、マネジメントというのは大事でありまして、予

算だとかそういうのを除いて、ある程度の決断は校長先生なり、またそういう方ができると思うんです。

しかし、校長先生がやろうと思ってもなかなか職員の人がそっちのほうを向いてくれないと。これは教育現場だけじゃなくて、行政の現場でもそうです。だから、トップとしてどういうマネジメントをしていくかというのは、やはり勇気と決断が大事だと私は思っています。以上です。

○荒井座長

ありがとうございます。

では、畠山委員、お願いします。

○畠山委員

学校の自治という点で、実は、私たち上田市のある学校で、県のほうで数年前に学校の提案型による教員の配置事業をやって、毎年いろいろな形でやっていただいているのですが、どこの学校でも不登校が課題になっておりまして、例えば、相談室の相談員の方は市で時間が半日だとか、時間で決まっていて、午前中はいるけれども午後になると相談室は誰もいなくなるとか、そんなことがとても課題になっています。

その中で、不登校に関わる教員を配置するというので、「校内フリースクール」をつくりたいということで、正規の教員を提案型でいただくことができた学校があります。

それをつくったときに、学校にある空いているスペースを使って自由に来られる子、勉強したい子ということで、本当に朝から帰りまで先生がついているのでとても効果があったということがありました。それは1年の単年度の事業で職員が引き上げられてしまったこともありました。

それから、そういう事業は県内で数校だとか、十数校だとか限られた学校になってしまうので、校長としてこんなふうにしたいという思いがあって提案をするのですけれども、なかなか上田市で1校だとか、東信地区で何校だとかという限られた形になってしまうので、どうしてもやりたいというところがあったときに、その選択肢が、それこそ校長はやりたいと思った事業の選択肢がたくさんあるとか、予算がたくさんついているかというところをしていただけると、実際に効果を実感している学校があったりしているので、本校は不登校の子どもたちをしっかりと受け入れられるという学校をつくりたいと思ってやっているという独自性を出しているのですが、なかなかそこが継続しなかつたりするところがあります。

いい事業ではあるのですが、継続的という観点から、もう少し増やしていただけるとありがたい。子どもたちもそうやって自分で工夫して学習しながらやっているところもあります。

それともう一つ考えたときに、校長のマネジメント力というか、やはりそのところはこれから必要になってくると思っています。前年度踏襲ということよりも、やはりこの先のことを見越してどんなことをこれからやっていけばいいか。いろいろな制約はあるんですけども、今校内でできることを少しでも変えていく。そういう校長のマネジメント力、もちろん校長のマネジメント研修等々県であるのですけれども、校長自らがいろいろなこ

とをやりたいと思っていることが大事かと。なかなか自分自身もできることはないのですけれども、そんなことを感じています。

○荒井座長

ありがとうございました。

本日は、全国から YouTube ライブで視聴されている方もいらっしゃいますので、私のほうから補足させていただきます。長野県教育委員会では「学びの改革実践校」という仕組みがあり、学校の手挙げ方式により様々な提案を行い、そこに人的な配置をするという取組を進めております。先ほどの発言では、そこで様々な成果が出ているということで、ぜひ予算の倍増をとすることを思っています。

ほかに、校長のマネジメント能力というフレーズが出て参りましたが、岩瀬委員からは、校長の在任期間の長期化という提案もありました。校長のマネジメント能力と関わって、いかがでしょうか。

では、竹内委員、お願いします。

○竹内委員

私も校長先生のマネジメント力やガバナンスをしっかり強めたほうがいいと思っています。それを感じました一例は、私、ニュージーランドに学校視察に行ったことがあります。ニュージーランドは、日本と単純比較はできませんが、大きく制度が変わっています。その校長に関しては、校長は26歳から校長になれます。つまり、プロフェッショナルとしてひたすら校長をやり続けるのです。要するに学校経営、マネジメントのスキルをどんどん上げていくということが求められていて、最初は小規模の学校からスタートしてどんどん大規模な学校にキャリアアップしていくという、26歳からなろうと思えばなれるということです。

ニュージーランドはそもそも教育委員会という仕組みがなく、国と学校が直結していて、先生の免許は国家資格になっています。財源とかそういうものは全部学校に直接配分されているので、お金の使い方、もっと言うと公費だけで賄えないので、民間からもお金を集めるんです。広告を出したり、学校のフェンスに企業の看板をつけたり、いろいろなあの手この手でお金を集める、ファンドレイジングも校長の役目になっています。

ですので、極端な一例ですけれども、校長先生というのは、もしマネジメント力を高めるのであれば、それなりの校長としてのキャリア形成というものが重要だと思います。

日本においても、例えば有名な工藤勇一校長先生は5年間麴町でやられたと思いますし、世田谷の西郷孝彦先生は9年間同じ桜丘中で校長をされてああいう実績を出されている、それだけ時間はかかるのだなということは思います。

○荒井座長

ありがとうございます。

ほかには、このマネジメントという部分ではいかがでしょうか。

では、近藤委員、お願いします。

○近藤委員

私自身の経験から言えば、教育委員会からの制約はあまり感じたことがなく、自分で好きなことを子どもと一緒に授業の中でやっていました。先ほど知事がおっしゃったように、長野県版の学習指導要領というものを、かつてはつくっていたことがありました。

その後は、学習指導指針を長野県に落とし込むような形にして事例がいっぱい載せられていたものがありました。それを、私は大変参考にさせていただいてきました。

今はとても交通が激しくてできませんが、子どもと一緒に教室内で勉強していたというよりも、町へフラフラ出て歩いたりして、自然豊かなところで学習をしていたこともあります。

本来、学校にはカリキュラム編成という自治力はあるのですが、それをどうやるのかというところで、なかなか前例踏襲という壁があります。私自身は教科書をあまり用いない方でしたが、その際「何で教科書を使わないんだ」という保護者の方から指摘もいただきましたが、「大丈夫だ」と言って2年間その方法で授業をしていたこともありました。その結果、その時の児童の漢字の識字率が高くなっていたことがありました。カリキュラムの編成では、そういうことができる自由はあるということ、先生方一人一人にもっと分かかってもらわないといけないんだろうと思います。

それから、校長のマネジメントですけれども、私が把握している中で、どんな学校にしたいのか、ということを実現するにあたって、その校長さんが一番困っていたのは担任のなり手が不足しているということでした。そこで、学級担任制ではなく、学年担任制にして、子どもたちが担任を選ぶような制度にしてはどうかと提案しました。これは麴町の工藤先生の発想とは違うのですが、その学校では一部を学年担任制にした結果、一番良かったことは子どもたちの自治力が高まったということでした。午後の時間、授業を聞いていると眠くてしょうがないから、給食を食べた後少しお昼寝をしてから授業を行うと集中力が上がるので、生徒会の提案でお昼寝の時間を設けたそうです。子どもたちもそういう自由があることが分かってくれば、学校も変わると思います。

校長の在職年数を長くするということについてですが、校長先生によって、例えば、5年必要な先生もいるし、自分でやろうと思ったことが、合わずに長く在職することは大変苦痛になる場合もあると思います。何年以上必要なんだということではなくて、自分でやりたいことがここでできるんだったら、それだけ長くいらればいいと、そういうことにしておかないと、制度的に何年以上必要ということになると、その人を苦しめる結果にもなるし、学校職員とうまくいかないということもあるし、子どもとの問題もあると思います。

○荒井座長

ありがとうございました。

では、お願いいたします。

○武田委員

校長のマネジメント力とかガバナンス力という話の中で、長期化とかそういう議論もあるのですが、今の校長にマネジメント力があるとかないとか、足りないとか、そういう議

論、あるいはもっと自由にできるのにやらないというのは、今のある校長の資質の問題に行ってしまうと議論してもしょうがないというか、それが仕組みの問題として、そういうふうにならない何かがあるのかということも議論していかないと。

これはたぶん平成23、24年ぐらいに長野県に非違行為が多かったときに、県教委の中に検討委員会みたいのを立ち上げた記憶があるのですが、そこでもずっと校長のマネジメント力、校長の指導力とずっと言われたと思います。やはりそういったものが発揮できない阻害要因があるのか、あるいはそういう校長のマネジメント力をつけるような研修体系ができていないのかとか、そういう議論をしなければいけないだろうと思います。

○荒井座長

ありがとうございます。

では、先に三輪委員、そして知事、お願いします。

○三輪委員

今お話があった中で、学校の自由度とか、変えていくときの思い、要因みたいな話が出る中で、やはり教職員がいろいろなところへ異動しやすい環境ということは、私はとても思います。先ほども少し申しましたが、本当に都市部に先生方、特に若い先生方の希望が集中していて、山のほうには先生方が行きません。私たちの波田小は毎年上高地に体験学習に行くわけですが、観光客の方から、「小学校でこんなところで勉強ができるなんて本当にうらやましい」ということをいろいろな方から言われます。どんな学校ですか、どの学校ですか、長野県はどこもみんなそうなんですかというふうに言われます。

そういった山に近いところがこの長野県の魅力になっている、草本さんがいる白馬であったり、三木市長さんがいる峰の原であったり、南信州だとか、鬼無里とか、そういった本当に自然、すばらしい人との出会いやおいしいもの、そんなものを求めて日本中、世界中から人が来るところに、やはり学校が必要だなということを私は思うわけです。

そういうところこそ小規模であるが故にフットワークが軽いため、今の5か年計画で目指している未来に向けての教育が公立であっても成し遂げられる可能性があるんじゃないかなということもすごく思います。

ぜひ小規模校のようなところに若い先生方が行って、僕たちがもっと子どもたちが行きたいなという学校をここでつくるんだという気持ちを大切に、校長たちと一緒に理想の学校をつくっていかれるような、そういう環境、制度を、ぜひぜひ整えていただきたいなということをとを思っているわけです。

私が初任の頃は、2校目に山へ行くと、3年そこで一生懸命地域の人と溶け込んでそこで暮らして地域のこと勉強して、やりたいことをいっぱいやって帰ってくると車が1台買えるぞと言われてました。そのぐらい山間へき地校と言われてたところは待遇が良かったんです。地域の人と密着してそこへ住むということは、住宅もですし、そこでいろいろ暮らすためのお金がついていました。県内の研修等で会う先生に聞いても、東京ですとか、鹿児島ですとか、そういうところの離島が今そういう状況だと聞いています。離島で3年間頑張っ、て、村の留学、ここでいうと山村留学に来ているような、本当に少人数のところでも一生懸命やってくると、3年間で充実できるので、行きたいという人が後を絶たない、

と聞いています。

今、長野県がそういうふうな地域の学校が魅力あるような制度であるかといったら、そうではないと思います。たぶん白馬のほうでも先生が足りないのではないかと思います。それこそフリースクールやインターナショナルスクールとつながりながら、新しい学校を展開していこうというときには若い先生の力が必要で、外からここの地に住みたいと、住んでくれた草本さんのような方を増やしていくには、そういった教育の実現ができるような、そういった予算の配当や重点的な人の配置のようなことをして、この5年の中で公立から成功例をつくっていくことは、私はとても大事だと思います。また、県外からも地域おこし協力隊のような、長野県で先生をやりたいという人を入れていくような、そんなことも自信を持って胸を張ってできるような制度があればいいなと思っています。以上です。

○荒井座長

ありがとうございます。

教育業界で働き方改革が叫ばれる中で、「働きがい」を主張する論調がとても強いです。ただ、「やりがい」だけをアピールすることには限界があると思われまます。例えば、山間へき地で若者が働くといい経験ができるからぜひ行くべきだと主張された場合、ではそこで若者が働きたいかという、「働きがい」だけではなく「働きやすさ」も具体的に明示していく必要があると思います。今の三輪委員の御発言を少し敷衍すると、例えば、山間へき地手当もありますが、長野県の状況は、いかがでしょうか。

事務局でも、他県と比較できるデータ等を後日御用意いただけたらと思います。

○阿部知事

へき地手当については、長野県は全国の中でも非常に低く抑えていて、したがって教員の皆さんから見ると非常に不満という形ではないかと思えます。教員の皆さんの処遇改善については、私も決して後ろ向きなつもりはありません。処遇の問題は我々がしっかり考えなければいけないと思いますが、ただそれだけではなくて、市町村長の皆さんと話をすると、まさに先ほどお話があったように、昔は地域に住んでくれたんだという話がありました。これは手当があったから住んでいて、本当に地域と一緒に地域の子たちと住んで学びたいのかというのは、たぶん両方あるのかもしれないですけれども、地域の皆さんからすると、お金が高いから来たんじゃないよねというふうには思っているんじゃないかと思って、だからといって我々が手当を改善する議論をしないつもりはないので、先生方の世界でそここのところのあり方というのを、ぜひもうちょっと考えていただけるとありがたいなと思っています。

先ほど岩瀬さんから包括的にいろいろお話いただいたのですが、予算の権限の話、人事、予算、いろいろなものをセットで分権していくのが私は望ましいと思っていますが、これは私立学校と違って、行政の場合にそうした権限を分権化するときは、大きな課題は民主的な統制をどこで効かせるかということになると思います。

私も予算編成権を持っていますが、私が勝手に予算をつくって、はいはいと執行しているわけではなくて、全部県議会の議決を経た上で予算化しているわけですので、一定程度校長裁量枠みたいにするというのは可能だと思います。ただし、その際、校長が勝手

に何に使うのか決められるのか。決めてしまう仕組みにするということもあるとは思いますが、例えば先ほど申し上げたように、教員の皆さんのコンセンサスだとか、あるいは地域の皆さんのコンセンサスだとか、そういうことが一定程度必要になるじゃないかと。

そういうふうにと考えると、学校の自治というのは、単にどこからお金と権限が降ってくるのではなくて、学校のマネジメントとセットでどういう意思決定プロセスを講じるのかとか、誰と誰が意思決定に参加するのか。そういうところまでセットにしないと、基は税金ですので、やはりその税金の使い方というところは、何か制度設計をするに当たっては精緻に考えていく必要があるのかなと思います。

かつて教育委員公選制の議論があって、今はそういう形になっていないのですが、この教育予算のところはどうしてもほかの分野と違ってしまうのは、予算編成権は首長が持っていて、教育委員会は要求する側。ほかの部局は私の部下が要求する側、私が予算を決定する側で、若干そのところは違いがあるので、いい形で民主的なコントロールをどう教育予算に反映させるかというのは、学校の分権とか、教育の分権を進めていく上では重要な論点かと思っています。

あと、もう一点だけ、先ほど竹内さんからお金の話がありましたけれども、長野県は今、「ガチなが」ということで、いわゆるふるさと納税ではありますけれども、返礼品なしのふるさと納税の募集をしています。その大きなメニューは、県立学校をはじめとする学校に対する寄付を募集しています。ぜひここは長野県内の学校の先生方、海外の学校は竹内さんからお話があったようにファンレイジングが学校運営者の責任と権限でやっているの、ぜひ学校の自治とか分権を考えるとときには、そうした制度を、各学校においても有効に使っていただけるといいなと思っています。以上です。

○荒井座長

ありがとうございます。

ではそれを受けて、竹内委員、お願いします。

○竹内委員

ありがとうございます。手短かに、私、これまでの経験の中で、例えば国の構造改革特区制度ができるときに、教育特区の仕組みをつくるお手伝いをちょっとさせてもらったことがあります。そのときに公設民営型の学校とか、アメリカのチャータースクール制度とか随分研究して、実際にアメリカにも何度か見に行ったりもしました。

今日皆さんの話を聞いて、大きな意味での方向性や描いている将来ビジョンについてはかなり共有できているなと私も感じて安心しているのですが、さっき荒井座長がおっしゃったように、それを具現化するための仕組みとか仕掛けとか、そういう枠組みを考えていく必要があるかなと思います。

皆さん課題はある程度分かっていて、変えなくちゃいけない、意識の面で変えなくちゃいけないということは分かっていると思うのですが、やはり変えるための構造の変革とか枠組みづくり、これは私、県庁で自然保育の制度をつくったときにすごく感じたのは、自然保育の仕組み、もともとは「森のようちえん」等の認可外保育施設の方々のためにスタートした議論だったのですが、結果として制度ができた後は、公立の認定こども園

や保育園の先生方に一番喜んでいただいているなど思っています。

つまり、そういう自然保育認定制度という一つの新しい枠組みができたことによって、先生方がそれまで何となく思っていたことを声に出せるようになったり、それを形にして実践に移せるようになりやすくなったということがあるかなと思うんです。

ということで、今の知事のお話を受けて、例えば一つの仕組みとして、自然保育認定制度は長野県独自でできました。今フリースクール認証制度もできつつあります。もう一つということで、今度は公立の学校を対象として、やる気のある校長先生がいるところ、市町村の手挙げ方式で、例えば信州型チャータースクール制度みたいな、そういうようなものも議論してもいいのではないかと思います。

アメリカは、教育法は全て州法なので州によってかなり細かく、チャータースクールの中身、その基準は違います。ですが、共通しているのは3%という上限を設けていることです。ですので、何でもかんでも無尽蔵にチャータースクールを増やしましょうということには、逆にアメリカではなっていないくて、本当にチャーターという免許状を3年なり5年で更新をしていく。それは厳密に質をしっかりと評価して、それをクリアしたところに財源、権限を与えていくという仕組みなのです。例えば長野県において、ある程度割合に上限を設けた上で、信州独自の公立学校のチャータースクール制度的なものの枠組みの検討としてはあってもいいかなと思いました。

あともう一つだけ。誤解を恐れずに言いますと、この教育の大きな枠組みというのは、国・都道府県・市町村・学校現場という4階層がある中で、今、指示系統という形にはなっていないですけれども、先ほどもお話が出たように、相変わらずやはり上を見て指示を仰ぐという風土が残っているなどのもあるのですが、もう一つ誤解を恐れずに言うと、本音と建前というものがものすごく混在している状態が維持されていて、なかなか本音が出しにくいし、建前がいろいろ交錯する中で、さっきの知事のお話につなげると、国の役目、都道府県の役目、市町村の役目、現場の役割、そこをしっかりと整理する必要があるかと思えます。例えば、不登校の支援は子どもによってケース・バイ・ケースなのに、子どもに対する支援の中身まで国でも議論し、都道府県でも議論し、市町村でも議論し、学校現場でも議論するという非常にやりにくいというか、風通しも悪くなったり、ダブルバインド的なことになったり、そのののを感じています。

この前、中教審で出された緊急提言も非常に表面的だと率直に感じる中で、ああいうことは基本的にはもう都道府県以下、市町村や学校現場に任せて、必要なインフラだけして、決定の権限や仕組みはできるだけ現場に近いところに下ろしていけばいいんじゃないかなと思います。よかれと思って文科省も丁寧にいろいろガイドラインを出してくれているのですが、それをみんな都道府県も市町村も同じようなことを上書きしていくとか、さらにコピーして何階層にもなっていくという学校現場の主体性を阻害しかねないような構造を、何とかする必要はあるかなということは強く感じます。

○荒井座長

ありがとうございます。

そろそろ時間が迫ってまいりましたけれども、先ほど岩瀬委員のほうから、学校のみならず教育関係者ということで、ラーニングセンターとしての図書館のあり方、あるいは市

町村教育委員会の役割、そして高校入試のあり方ということで幾つか投げかけをいただきました。ほかの皆様方は、いかがでしょうか。

では、三木委員、お願いします。

○三木委員

私、先生方の働き方改革と教員とか学校に対する本来のイメージアップというのを検討してもらいたいと思います。それは大きな問題となっておりますし、採用試験のときの応募の減少にもつながっているのではないかと考えています。以上です。

○荒井座長

ありがとうございます。

他には、いかがでしょうか。村松委員、お願いします。

○村松委員

ありがとうございました。皆さんの意見を聞きながら、本当に大きな、マネジメント能力、構造の変革も必要だと実感した次第ですが、その構造の変革とかをやっていくときに、三木市長からもお話がありましたが、抵抗になるのは意外と内部だったりするのです。なかなか自分たち自身が変われない。捨てられないと言うのでしょうか。学校とか教育に関わる皆さん、やはりそれぞれの思いがあるので、これをどうしてもどんどん増やしていったら、いわばカリキュラムのオーバーロードではないですけども、どんどん積み重なって行って動けなくなっていくというところがあります。

その部分はやはりトップダウン的に捨てる仕組みみたいなものをつくっていくというのが大事なのかなと思います。例えば今回の基本計画も指標の議論の中で、学力テストをあえて指標にしないという議論があったと思います。ああいうことによって、またそういうのを別なところで振り向けるということで次のフェーズにも行けると思うのですが、なかなか現場レベルでは、今コロナとかでも相当いろいろなことは進んだのですが、捨てるとか、これは要らないという大きな判断というのは難しいところもあると思います。そういった捨てる仕組みみたいなものがないと、選択させるためには余白が必要なので、その余白をつくるようなことをしていかないと、せっかくこの、ヒト・モノ・カネが用意されてもできなくなってしまうのではないかと、ぜひそういった捨てる仕組みを検討いただければということでお話しさせていただきました。以上です。

○荒井座長

ありがとうございます。戦後以降、教育業界がたくさんの荷物を背負ってきていますので、それを自分たちで下ろすことができるのか、できないのか。できない場合、しかるべきポジションが勇気を持って決断していくことをまさに仕組み化していくことも必要だと感じました。

ちょうどお時間になりました。ここで今回この円卓会議の一つの仕組みではありますが、本日の会議の様子をグラフィック・レコーディングの手法で整えさせていただいております。

今回、株式会社きみそら共育研究所の田上誠悟様にグラフィックレコーディングをお願いしております。御覧いただき、最後にその後知事からまた本日の感想等をいただけたらと思います。

では、田上さん、聞こえますでしょうか。よろしくお願いいたします。

○田上氏

よろしくお願いいたします。御紹介にあずかりました元川崎市の小学校教諭で、今、川崎市のほうで教育企業に勤めております。今日の会議、本当にありがとうございました。

今日の会議の県知事のお話と、そして今、皆さんがお話された内容を少し視覚化させていただきましたので、それを3分ほどで振り返らせていただければと思います。それでは、画面共有をさせていただきます。

それでは、阿部県知事のお話を、まず振り返らせていただきます。

今日の第1回信州学び円卓会議、最初は阿部守一県知事のお話から始まりました。その思いについてを、今ここで1分間ほどで振り返ることができればと思います。

今日2023年9月1日始まりました信州学び円卓会議。今日の最初の話の部分としては、まず、この長野県の学びというものがどのようになっているのか。今いろんなところで子どもたちにとって最適な学びということを考えているかと思います。

その中でまず出た話としましては、各県内を回って対話をしてきた阿部県知事、その中で一番多かったのは教育についてです。固有の課題も出てきて、居場所、学び、いろんなことが出されましたが、やはり全てにおいて共通するのは、多様な選択肢を与えるということです。

そして次にそれを進めていく。そのためには、市長、行政だけでなく、みんなで同じ方向を見て進めていくことが大切ということが出ました。その中で、全員のプレーヤー、それぞれが同じ方向を見ながら進めていくというところが、恐らくその後の話にも進んでいったかと思います。

「信州から新しいモデルを」という話もありましたが、その後、皆様のお話があり、そして、約1時間の第1回信州学び円卓会議の本論のところに入っていました。長野県の子どもたちにとって最適な学びのあり方とは何なのかということで、この1時間を2分間ほどで振り返らせていただければと思います。

それでは円卓会議の内容です。

まず、荒井先生のほうから、各委員の発言からコンセプトブックの話がありました。本当に大事なところ、学校の自由、自律性、主体性というところを大事にしている、そして県知事のほうからも、各方向性はみんな一致であると、学校の自治、先生の主体性を大切にすること、マネジメント、意思決定の話というのが皆さん共通の考えとして一致していたと思います。

ただ制約がその中にある、なかなか進まない。そんなところでは教員の学び、手札の話、学習環境の話、チャレンジを守るような仕組み、小さい失敗が必ず起こる中で、制度も変えながらどうしていくのか。研修については、コンテンツ、機会、ビジョンといったところで自主的に学ぶ、この自主というところが、全体のキーワードになっていたかと思います。

研修会・研究会でも新しい体制が必要だと。じゃあどうするかというと、5年、10年後を考えて、財政面も含めて、けれども国や県にとらわれずに決断していく、そんなところは必要だと。

ただ、もう長野県にはもう既に成果を上げている仕組みがたくさんあります。信州版の学習指導要領という話もありましたが、長野もう既にいい実践、できる力が必ずあると。けれども、それは先生方の資質というところに今課題があるのではなくて、やはり仕組みだと。力を発揮すること、それには時間もかかるし、若い力も必要だし、外からの力も必要。だけれども長野県で先生をやりたいと思える人たちが増えていくような仕組み。けれども仕組みだけじゃなくて、県知事のお話もありましたコンセンサス、お金、権限だけでなく、決定までのプロセスを民主化しながら、みんなの力が発揮されている仕組み、構造というものをつくって、形にしていくことによって実現しやすくなる。そんなところを本音で言える、そんな今回第1回目の信州学び円卓会議だったかと思います。

今日長い時間でしたけれども、本当に貴重なお時間をありがとうございました。

○荒井座長

いかがでしたでしょうか。

なお、皆様方から御発言いただいたものもグラフィックレコーディングして、今後ホームページ上に記載する予定です。今後の県民の意見交換の場でも、参加される委員がどのような考えをお持ちなのかを知るリソースにもなると思います。

様々な不手際等ありましたけれども、では最後に知事のほうからコメントをいただきたいと思います。

○阿部知事

荒井座長はじめ、皆様ありがとうございました。また次回以降議論を深めていきたいと思っておりますけれども、やはり学校、あるいは先生方の主体性をどうサポートしていくのか。そこら辺の仕組みのあり方ということが一番重要なポイントであったかと思っております。

冒頭岩瀬さん、草本さんがほぼ同じことをおっしゃっていましたが、私も実は昔、副知事のときに長野県にチャータースクールをもっとつくれないうことを一生懸命考えたときがあります。その動きは一旦なくなりましたが、市町村立学校や県立高校も統廃合の動きの中で、校舎みたいな施設は使えるものが出てきている中で、もう一回行政と市民が力を合わせて学校をつくるというようなことにも、今度チャレンジしていかなければいけないかとも思いました。

もちろん公立学校自体の改革も重要だと思っておりますが、長野県の総合計画、社会的共通資本という概念を打ち出していますので、やはり民と行政がどうやって協力し合うのが最適なのかということ、ぜひ一緒に考えていきたいと思っております。

あと本音と建前という話がありました。学校の先生方と話す、外ではあまり本音が語れない人が多いのかなというのが私の率直な感覚なので、今後はもう少しこれからの円卓会議の議論の中では、学校現場の先生方からもどんどんいろいろ思っていることを出していただくことが必要なのではないかと思っております。

文科省が開設した **Twitter** が炎上しているみたいな話も聞いていますが、たぶん学校の

先生方にはかなり問題意識を持たれている方も多いと思うので、ぜひどんどんそういう方たちの意見も反映できるようにしていきたいと思います。

それから、先ほど国も県も市町村も学校も同じようなことを考えているという話、これは教育に限らず全ての行政分野で似たようなところがあるので、これは我々知事会として、地方分権を積極的に、分権というのは国と県と市町村と、教育でいけば学校現場の役割分担をもっと明確にしないといけないと思っています。今日の議論にも通じる話だと思っています。

そしてもう一つ、教員の皆さんの働き方改革と処遇の改善。これは私としてもぜひ皆さんと一緒に考えて、よりよい形のものにしていきたいと思っています。そのためには、まず一つは、仕事のあり方を変えないとたぶんいけないと思います。私、いろいろなところで、私が若い学校の先生だったらとてもじゃないけれどもやれないかもしれませんと言っています。授業は一生懸命やって子どもたちの学力を上げろ、運動会しっかりやれ、修学旅行に連れて行け、問題がないようにしろ、保護者にもちゃんと対応しろ、いろんなことを言われて、とてもじゃないけれども、本来何をやるべきかというところがだんだん薄くなるんじゃないかと思っています。

例えば、先生方が本当にやるべきことは何なのかということに集中できるように、そうした議論と、それから集中できる環境づくりもぜひ皆さんと一緒に取り組んでいきたいと思ひますし、これには学校以外の皆さんの御協力が不可欠だと思いますので、そういう働きかけ、呼びかけもできればどんどんしていきたいと思っています。

もう一点、教育関係の皆様には検討していただきたい、考えてもらいたいのは、そうしたときに教員のあり方自体は今までと変わらなくていいのかということがあると思ひます。オンラインでの学習もできるようになる中で、学校の先生の教え方、あるいは教室での振る舞い方、こうしたものも恐らく変わっていかないといけないだろうと思ひますし、もう一つ、いろいろな方から言われるのは、学校にもっと私たち、経済界の皆さん、そういう皆さんをどんどん入れてもらって、学校で教えられるようにしてほしいということも言われています。これは特別免許の話、あるいはそもそも教員免許のあり方はどうあるべきなのかということにも関わる話だと思ひますが、ぜひ、こうしたこともセットで、先生方の働き方改革ということもしっかり考えていきたいと思ひます。また次回以降、非常に今日皆様方のお話を聞かせていただき、私も一段とやる気になって頑張りたいと思ひますので、どうぞよろしくお願ひいたします。ありがとうございます。

○荒井座長

ありがとうございました。

改めて、第4次教育振興基本計画をお目通しいただけたらと思ひますし、「個人と社会のウェルビーイング」の実現のために、我々一人ひとりがどのように汗をかいていけるか、引き続きの課題意識として引き取っていただけたらと思ひます。

本日、学校の自治や教師の自由度を保障するための教育行政のあり方を問い直していこうということで、これまでの当たり前を問い直し、新しい当たり前を想像していく機会になればと思ひますので、引き続き御協力ください。

本日はどうもありがとうございました。

それでは、事務局のほうに進行を戻しますので、よろしくお願いいたします。

○丸山課長

事務局より2点御連絡がございます。今後の日程についてですが、第2回信州学び円卓会議は来年2月頃の開催を予定しております。具体的な内容等は改めて御連絡をいたします。

また、第2回信州学び円卓会議開催までの間に、県民意見交換会を9月23日の根羽村を皮切りに、県内各地で開催する予定です。委員の皆様におかれましては、開催に当たりまして御協力を賜りますよう、よろしくお願いいたします。

2点目でございますが、本日の議事録及びグラフィックレコーディングをしたものにつきましては、県のホームページ等に公表する予定です。公表に当たりまして、皆様には事前に掲載内容の御確認をお願いすることもございますので、よろしくお願いいたします。

3 閉会

○丸山課長

それでは長時間にわたりありがとうございました。

以上をもちまして、本日の会議を終了いたします。どうもありがとうございました。

（了）